
ゼロのロストマジック使い

冒険ファンタジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロのロストマジック使い

【Nコード】

N0162X

【作者名】

冒険ファンタジー

【あらすじ】

神の暇潰しで殺された神羅斬九郎しんらざんくわつは、フェアリーテイルの失われし魔法の力を得て、ゼロの使い魔の世界に飛ばされる事になった。駄文注意、亀的更新、一応原作通り。

ゼロのロストミュージック使い(前書き)

新作始めました。

皆さん、温かい目で見てください。

ゼロのロストマジック使い

俺は神羅斬九郎^{しんらざんくわう}、どこにでもいる高校生だ。

でも、今俺がいる所は、見た事が無い白い空間だった。

「いきなり何だここは？」

「どもー」

「？」

いきなり誰か出て来た。

その人物は、白いローブを着た威厳のありそうなじーさんだった。

「これこれ、ありそうなじゃなくて、ほんとに偉いんじゃぞ」

「あれ？口に出てたか？」

「言わなくても分かるわい。お主名は？」

「俺？神羅斬九郎。んで、俺は何でここにいるんだ？つか、アンタ誰？」

「ここは神の空間じゃ。そしてワシは神じゃ」

おいおい神かよ!？

「つか、その神様が何で俺なんかに？」

「実はの…ワシのちょっとした暇潰しに付き合ってくれんかの？」

「暇潰しで態々俺をここに拉致ったのか？」

「ちなみに元の世界じゃ死亡扱いになつとるからの」

は？今何と言ったかジジイ！

「ちょっと待てコラジジイ！テメーの道楽で俺を殺したんかゴルア

！」

「ちょ、ちよつと待たんか！？というか、神であるワシによく掴み掛るモンじゃのう！？」

「理不尽な事仕出かす奴に何を畏まる必要があるんだコラ！例えお偉いさんだろつと神様だろつと、ム力つく事はム力ついて何が悪い！」

そう啖呵を切る斬九郎だった。

「まったく、今時珍しいわい…まあ、そんな若者だからこそ楽しめるかも知れんな」

「んで、アンタは何をしたいんだ？暇潰しって言うてたけどよ」

「実はのう、生まれてから8千京年程経つのじゃが…」

「じーさん長生きだな…」

「神じゃからな。んで、つい最近知った事何じゃが、ほとんどの世界でワシ以外の若い神が態々転生者を使って望みの世界に飛ばしてるのが流行ってての」

「はた迷惑な事だな。んで、アンタはそれに乗じてやってみたと？」

「そう言う事じゃな」

かったりい。

「とにかく、俺はそんな下らねえ事に付き合ってる義理は無え！とつとと帰しやがれ！」

「じゃから、お前さんは元の世界じゃ死亡扱いになっておるのじゃ、帰せと言われても帰せんわい」

「んじゃあ、アンタをブチのめして…「ちよつと待たんかい！？力尽く！？ワシ神じゃぞ！？」見た目の威厳しか無さそうなジジイにとやかく言われたくない！」

「酷い！？頼む！ワシの頼みを聞いてくれえい！」

しばらく時間が過ぎた。

「まったく、分ーったよ。行きゃいいんだろ行きゃ」

「良かったあ… やつと… 聞き入れてくれたのう…」

既にボロボロな神様（笑）。

「（笑）を付けなくていいわい!？」

「んで、どこの世界に飛ばすんだ？」

「それはお主が行きたい所にじゃよ」

「そうは言っても… 俺は特に行きたいって所は解んねえから、アンタが決めてくれ」

「普通は自分が望むモンじゃがのう… まあお前さんは他の人間と比べて規格外な所があるからの」

「はよ決める!」

んでじーさんは勝手に決めたそうだ。

「んでどこに決めたんだ？」

「それは行つてからのお楽しみじゃ」

「うわゝ、憎つたらしゝ（指を鳴らしながら笑顔で近づく）」

「怖っ!？止めとくれ!？すまん、調子に乗ってしもつた!？」

素直に謝ったから良しとしよう。

「そんでの、お主には能力を授けようと思つ」

「能力？」

「その世界で生きていける様にの」

「ふゝん…」

そうは言っても…すぐに思い付かねえなあ…。

「まあお主の事じゃからすぐには思い付かんじゃろ？」

見抜かれた！？

「そうじゃのう、神をも恐れぬお主には…」

神は、空間にディスプレイ的な物が浮かび上がり、何かを検索していた。

「おお、コレなんかお主にピッタリじゃ！」

「何がだよ？」

「お主には、フェアリーテイルの魔法、滅神魔法ゴッドスレイヤーを授けよう」

「はあっ！？ゴッドスレイヤー！？」

それって要は神殺しじゃねえのか！？

「うむ、それと見た目も同じにしよっ」

ジジイがこっちに手をかざすと、俺の体が光り出した。

「何しやがったジジイ！？」

「見た目もそれらしくしようと思っての。名前も似てるし」

そして姿が変わっていった。

「何だこの姿は？」

「漫画フェアリーテイルに登場する神殺しのザンクローウじゃ」

「何ソレ？何で俺と同じ名前？」

「お主フェアリーテイルを知らんのか？結構メジャーな漫画じゃぞ？」

「俺は漫画とか見ねえからな」

「今時珍しい子じゃのう、漫画を見ないなんて」

どうでもいいだろその辺は。

「更に特典として、フェアリーテイルの失われし魔法ロストマジックを使える様にしたぞい」

「ほう」

どんな魔法かは、頭の中に直接伝わった様なので、扱い方が解った。

「後、神様特権を使って、蘇生魔法も付けておいたぞ」

「蘇生！？ドク みたいなザルや オリとかさうゆうのが使えるのか！？」

「お主：漫画は知らん癖にゲームは知つとる様じゃの…」

「それはそれ、これはこれだ」

「随分と都合が良いのう…後は、その世界での魔法を扱える様にしておいたぞ」

「え〜つと、今貰った魔法は、神滅魔法、時のアーク、具現のアーク、人間隷属魔法ヒューマレイズ、丑の刻参り、マギルティセンス、大樹のアーク、治癒魔法、蘇生魔法、そしてこれから行く世界の魔法、全部で10個の魔法か。多すぎる様な？」

まあいいか、くれるって言うんならな。

「後、神滅魔法は炎だけじゃなく、水、風、土、氷、雷、そして光の属性も付けておいたぞ。ついでにロストマジックの副作用は無し

にしといたぞ」

「それはありがたいな」

「技名は既に分かっている奴以外の技は自分で決めてくれ」

「了解」

これで準備万端ってか？

「これからの未来はお主の結果次第じゃぞ！」

「急に神様らしくなったな？」

「じゃからワシは神様じゃと言つとるつに」

「いじけんなジジイ！」

俺が手を出そうとしたら、

「止めて止めて！？お主は今ゴッドスレイヤーなんじゃ！お主が本気ならワシ何かひとたまりも無いぞ！？」

「…悪かったな」

「ほっ…」

「んで、いつになったら別世界とやらに行けるんだ？」

「待ってる、直ぐ開ける」

じーさんは両腕を広げて、呪文みたいのを唱えた後、なにやら空間に穴みたいのが出て来た。

「さあ、この穴を潜れば別の世界に辿り着ける。新しい自分を楽しむのじゃ！」

「何でこうゆう時の言い方がかなり偉そうなんだ？まあいいや、じやなじーさん、長生きしろよ」

「ワシ…8千京年生きてるんだけど…」

そしてザンクローは、新たな世界へと旅立って行った。

ゼロのロストマジック使い（後書き）

ザンクロウは作者の好きなキャラです。

書いてる時に思った事があります。

ストーリーを書くよりも、プロローグでかなり時間をかけてしまいます。

今回はゼロのルイズと神殺しのザンクロウです。

ザンク로우設定(前書き)

モデルをザンク로우にしました。

ザンクロウ設定

名前

神羅 しんら

斬九郎 ざんくろう

ゼロの使い魔での名前

ザンクロウ・シンラ

年齢

18歳

人物像

一本筋の通つて、曲がった事が大嫌いな性格。でもエロい事には本能忠実。時々べらんめえ口調になる。

笑う時は笑い、怒った時に怒り、泣きたい時に泣くという感情豊かな部分もある。

思った事は偶に口に出しやすい。

神の力を手に入れてから、自分が神の存在と思うようになる。

貴族に対しては傲慢な態度を振る舞い、平民に対しては親しい振る舞いをする。

立場

神殺しの力を得る。

神の暇潰しでゼロの使い魔の世界へ飛ばされる。

ルイズの使い魔のリーヴスラシルになる。

容姿

フェアリーテイル、煉獄の七眷属のザンクロウ

能力

各属性の神滅魔法ゴッドスレイヤー

時のアーク

具現のアーク

人間隷属魔法ヒューマレイズ

丑の刻参り

マギルティセンス

大樹のアーク

治癒魔法

蘇生魔法（但し一人一度だけ）

ゼロの使い魔の世界の魔法

備考

神により、ゴッドスレイヤーの部分は火だけじゃなく他の属性も扱える。

ちなみに火の色は白。

ロストマジックの副作用が無い。

ザンク로우設定(後書き)

技については、原作とオリジナルで出していきます。

一応フェアリーテイルに出てる魔法や人物を出す予定です。

ゼロのルイズと神殺しのザンクロウ（前書き）

ザンクロウが来た世界は？

ちなみにザンクロウは、原作知識はありません。

ちなみにノーロさんは、ザンクロウの服の中にあります。

ゼロのルイズと神殺しのザンクロウ

ルイズサイド

「宇宙の果ての何処かにいる私の下僕よ！神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ！我が導きに応えなさい！」

彼女はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

魔法学院の生徒だが、彼女は何故か系統魔法を満足に使う事が出来ずにいた結果、魔法成功率0割だった為に「ゼロ」と呼ばれ、「ゼロのルイズ」という不名誉な二つ名を付けられた。

そして、二年の春に行われる使い魔召喚の儀式が行われていた。使い魔召喚の儀式とは、自分の系統を判断する為の大事な儀式でもあるのだ。

そこで気迫たつぷりの彼女が真剣に叫んだ。

その瞬間、爆発した。

周りにいた生徒達がルイズに野次を飛ばした。

だが爆煙が晴れると、そこには一人の人物がいた。

「こ…こんなのが…神聖で…美しく…強力な…使い魔…」

これが、現れた人物、ザンクロウとルイズの出会いだった。

ザンクロウサイド

着いて早々、いきなり爆発かよ！？一体どこのバカだ？

すると、ピンクの髪の女が近づいて来た。

「あんた誰？どこの平民？」

「あん？」

なんだあこの偉そうなガキは？

「何だあガキ、俺に何か用か？」

「がっ、ガキですって！？」

すると、周りにいた連中が笑いだした。

「おいルイズ、「サモン・サーヴァント」で平民を呼び出してどうすんだよ？」

「つかさっそく平民に嘗められてるな。さすがゼロのルイズ」

平民だあ？俺は神の力を持つてるから…俺は神だぞ？

「ちよ、ちよっと間違っただけよ！」

「間違いつて、ルイズはいつつもそうじゃん」

「さすがゼロだな」

誰かがそう言うのと、周りが爆笑していた。

ルイズと呼ばれてるガキはプルプルと震えていた。

何だあ？このガキに対してイジメか？

「ったく、ここh」うるさーい！」「うおっ！？」

「ミスタ・コルベール！もう一回召喚させて下さい！」

ザンクロウは、「ここはガキの溜まり場か？」と言おうとしたが、

ルイズに遮られた。

ルイズは、あのツルツパゲに質問をしていた。

多分、ここの先公か？つか、いつの間にか笑いが収まってるな？

「それはダメだ、ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか!？」

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は「使い魔」を召喚する。今やっている通りだ」

つまり…神の力を持つこの俺を召喚したって事か。って事はこのガキ、実はすげえ奴なのか!？」

「それによって現れた使い魔で今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。一度呼び出した使い魔は変更する事は出来ない。何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるにも拘らず、彼を使い魔にするしかない」

「でも、平民を使い魔にするなんて聞いた事がありません!」

ルイズがそう言うと、再び周りにいた生徒達は笑いだした。なるほど、だいたい分かって来たぞ。要は進級する際の試験みたいな物か？

「これは伝統なんだ、例外は認められない。彼は…」

コルベールは、ザンクロウに指差した。

何だコツパゲ、人を指差すなコラ。

「ただの平民かもしれないが、呼び出した以上君の使い魔にならなければならぬ。古今東西、人を使い魔にした例は無いが、春の使い魔召喚の儀式的ルールはあらゆるルールに優先する。彼には、君

の使い魔になって貰わなくてはな

「そんな…」

うわー、目に見えて落ち込んでるなこりゃ。

「さて、では儀式を続けなさい」

「えー、コレと…?」

コレって言うなよ。

「そうだ。でないと、君は本当に退学になってしまいますぞ?」

「うっ…」

何か覚悟を決めなきゃって感じだなこのガキ。

するとルイズはザンクロウの近くに寄り、困った様に見つめた。

「ねえ」

「あん?」

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて、普通は一生無いんだから」

「は?」

ルイズは目を瞑り、持っていた小さな杖をザンクロウの前で振った。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンダゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

ルイズは呪文を唱え終わると、ザンクロウに近づいた。
が、

ザンクロウは胸を押さえ始めた。

「ぐああああー！！？何だ！？胸が熱い！？」

この時、ザンクロウの胸に何かが刻まれ始めた。

「すぐ終わるから待ってなさいよ。『使い魔のルーン』が刻まれてるだけよ」

「刻むな！ナモン！！」

そして、ザンクロウの胸のルーンが刻み終わった。

「サモン・サーヴァントは何回も失敗したが、『コントラクト・サーヴァント』はきちんと出来たね」

コルベールは嬉しそうに言った。

「相手がただの平民だから『契約』出来たんだよ」

「そいつが高位の幻獣だったら契約なんか出来ないって」

また周りにいた生徒達が笑いながら言ってきた。

するとコルベールがザンクロウに近づいた。

「ふむ…珍しいルーンだな」

すると、スケッチを取り出してルーンを写し書きをした。

「さてと、じゃあ皆、教室に戻るぞ」

コルベールがそう言うと、宙に浮いた。
それに続いて他の生徒達も飛んだ。
へへ、これが魔法か。

「ルイズ、お前は歩いて来いよ！」

「あいつ「フライ」はおるか、「レベテーション」さえもまともに出来ないんだぜ！」

「その平民、あんたの使い魔にお似合いよ！」

口々にそう言つて、笑いながら学院へと飛び去っていく生徒たち。
あいつら、一々悪口言わなきゃいらねえ連中なのか？

残されたのはルイズとザンクロウだった。

ルイズは二人つきりになると、ため息をついた。

それからザンクロウの方を向いて大声で怒鳴った。

「アンタ、何なのよ！」

「俺か？俺は神だ」

「はっ？」

目が点になったルイズ。

「はあ…こんなバカでどうしようもない妄想癖の平民が出てくるなんて、最悪だわ…」

「おい！？さり気なく馬鹿にしてるだろ！」

「アンタの様な平民が神を名乗るなんて罰当たりにも程があるわよ！」

「はあ？罰なんぞ当たるかよ。俺はマジで言ってるんだ！」

「呆れた。こんな頭の可哀想なのが来るなんて…」

「おい！いい加減にしるよコラ！」

怒ったザンクロウは、体から炎を吹き出した。

「なっ！？何よそれ、炎！？」

「お前が散々変な事を言ってくるから、こっちは頭キテナだよ！」

「あんた、先住魔法が使えるの！？」

「あん、先住魔法？何だそりゃ？」

「っ、杖も使わないで、魔法を使う事よ！」

「知らねえな。こいつは神の魔法だ！」

ルイズは震えていた。

「か、神の魔法って…始祖ブリミルが使ってた虚無の魔法なの？」

「虚無？知らねえ」

「えっ、知らないって！？」

「俺の魔法は神殺し、滅神魔法だ！」
ゴッドスレイヤー

「ご、ゴッドスレイヤー！？」

「そっぴや俺の名前を言ってなかったな。俺は…」

ザンクロウは一息入れて言った。

「俺はザンクロウ、神殺しのザンクロウだ！」

「ええっ！？」

ザンクロウはルイズにそう名乗った。

ルイズサイド

正直、頭がイカレた平民を呼び出したのかと思ったら、体から炎が吹き出たから先住魔法を使うメイジって思ったら、神の魔法を使う

って言ってきたわ!?

ザンク로우って言ったかしら?何か、とんでもない奴を使い魔にしちやっただわ私!?

そう言えばコイツの二つ名の神殺して一体…?
ルイズはザンク로우に聞いてみた。

「か、神殺して…アンタ…神を殺しているの…?」

「まあな」

即答で答えたわよ!?!本当に神を殺しているのこイツ!?

「数える程じゃないが、神を倒した事もあるしな」

ちよつとちよつと!?!コイツ一体何してるのよ!?!本当にとんでもない奴じゃない!?!

ザンク로우の事でルイズは、内心恐怖でいっぱいだった。
神の魔法って言ったわね、他にあるのかしら?

「ねえザンク로우…」

「何だ?」

「あ、アンタの魔法って…ほ、炎だけ…なの、かしら?」

って、何噛んでるのよ私はー!?!?

するとザンク로우は、

「炎だけじゃねえぞ、水とか土とか風とか、他には氷や雷とかあるな」

系統魔法全部使えるじゃない!?!?

「他には、時のアークとか、具現のアークとか」

えっ？時、具現、の…アーク？

「どうゆう魔法なの？」

「そうだな…まずそこらの土を盛り上げてみるか」

そう言っつて土を魔法で盛り上げた。

「なあルイズ」

「なに？」

「この盛り上がった土を、盛り上げる前の状態にしろっつて言われたら？」

「出来る訳ないじゃない！」

「普通はそう思うだろ？だが、時のアークをもってすれば！」

ザンクロウが盛り上げた土に手をかざすと、盛り上がっていた土はみるみる土の中に入っていき、盛り上げた形跡が無い平地となった。

「な、何よこれ！？」

「これが時のアーク。物体の時間を操って壊れたモノを治したり、逆に老朽化させたりも出来る魔法だ」

物体の時間を操る魔法…こんなの初めて見た。

「他には何があるの？」

「ああ、そうだな…ルイズ、お前何か欲しい物はあるか？」

「えっ？」

いきなり何を言い出すのよ。そんな急に言われたって何も思い付か

ないわよ。

「何か無いか？」

「ちよつと待つて…」

うーん…関係無いけど、これはどうかしら？

「空を飛ぶ翼が欲しいわ…何て」

「翼だな。それ！」

すると、ルイズの背中から翼が生えた。

そして宙に浮いた。

「えっ…ええっ！？私、空を飛んでるわ！？」

「それがお前の望んだ事だろ？」

「確かに望んだけど、とにかくアンタすごいわね！これ何の魔法なの？」

「それは具現のアークって言って、俺の望んだものが全て具現化する魔法だ」

欲しいものを現実に出す魔法って、夢の様な魔法じゃないのよこれ！？

「他にもまだあるけど、取り合えず解ったか？俺の神の魔法はよ？」

「これだけのものを見たら信じるしかないわね」

「やっと信じてくれたか？俺が神だと言う事をよ」

「正直そこは納得いかないけど、とにかくすごい魔法が使える事は解ったわ」

コイツは得体が知れないけど、神の魔法を使えるんだから神聖で、

美しい：は微妙だけど、強力な使い魔が私の所に来たわ！
ルイズは、ザンクロウの力に喜んでいた。

「んでルイズ」

「なに？」

「この後どうすんだ？」

「本来なら授業に戻らないといけないけど、ザンクロウの事もあるし、今日は授業を休んで、アンタの事を聞かせて貰うわ」
「了解」

するとザンクロウは宙に浮き始めた。
多分風の魔法ね。

「んでルイズ、どこ行きゃいいんだ？」

「あそこに見えるのが、トリステイン魔法学院よ」

少し遠くに見える建造物の方に指を刺した。

「あそこか。んじゃあ行くぞ」

「あつ！？ちよつと待ちなさいよ！」

ちよつと扱いづらいけど、まあ良いわ。見てなさい、すぐに私がご主人様だつて事を思い知らせてあげるわ！

ルイズは先程とうつて変わってザンクロウを使い魔にした事に喜んでいた。

ザンクロウサイド

ある程度は話して、魔法も見せた。これで少しは信じただろうな。

さて、ルイズは一足早く学院長の所に行つて授業を休むと言いくと云つてたから、俺は外で待つ事にした。
すると、ルイズが戻つてきた。

「待たせたわね。行くわよ」

そう言つてルイズの後をついて行き、ルイズの部屋に着いた。

「ここが私の部屋よ。覚えといてね」

「ああ」

意外とキツチリした部屋だな。

「そつといえ私の名前、まだ言つてなかつたわね。私はルイズ、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

名前が先つて事は、外国みたいに言えば良いんだな。

「俺はザンクロウ、ザンクロウ・シンラだ」

「神を名乗る割に短い名前ね」

「悪かつたな」

その辺どうでもいいけどな。

そついや気になつてた事があつたな。

「なあルイズ、この胸に刻まれてる文字は何だ？」

「それは使い魔のルーンよ。私の使い魔ですつていう印みたいのものよ」

なるほど、俺はルイズの所有物つて訳か。

「それで、俺はルイズの使い魔になっちまったけど、具体的には何をすりゃいいんだ？」

「そうね。まず、使い魔は主人の目となり耳となる能力を与えられるわ」

「見れるのか？」

「見れないわ…」

「そうか…」

俺の見てるものまで見えたらプライバシーの侵害だぞ？

「他には？」

「使い魔は主人の望む物を見つけてくるのよ。例えば硫黄とかコケとか…」

「具現のアークですぐに出せるが？」

「それ便利よね。私も欲しいわその魔法」

やっぱり便利だと思っよなこれ。

「そして、使い魔は主人を守る存在であるのよ！その能力で主人を敵から守るのが一番の役目よ！まあザンク로우なら問題無いと思うけど」

「人間や獣相手なら負ける気は無えぜ！」

「頼もしいわねザンク로우！」

そう言われると照れるな。

「そういえばザンク로우、アンタの魔法ってさっき見せた魔法以外にもある？」

「もちろんあるぞ」

「どんな魔法なの！」

「そうだな…人間を隷属化させる人間隷属魔法とか…」

「人間を隷属！？野蛮な魔法もあるのね！？」

言ってみれば完全奴隷化だからなこの魔法は。

「相手の髪一本あるだけで、その人物の体を好きに弄る事が出来る呪殺魔法とか…」

「髪一本で好きに弄れるって！？何その危ない魔法は！？」

丑の刻参りってまんま呪いに使われてるからな…。

「感覚を共有するマギリティ…センスとか…」

「やつとまともそうなのが来たわね。感覚を共有というのは？」

「簡単に言えば、痛みとか考えてる事とかを一緒に感じる事が出来る魔法だな」

「使い魔としては普通っぽいわね」

最初に言ってた主人の目となり耳となるのと似てるからな。

「他には、土地の魔力を利用して自分の魔力を高めたり、相手の魔力を低下させたりも出来る大樹のアークとか…」

「土地の魔力を！？それはすごいわね！」

「後、応用として爆発魔法も出来るぞ」

「ば、爆発…」

「どうしたルイズ？」

「いついえ、何でもないわ！？」

どうしたんだ？急に暗くなって？

そっぴや外を見たらもう夜だ。

「もうこんな時間ね」
「そういやルイズ、俺はどこで寝りゃいいんだ？」
「あっ！？そうね、ベッドは一つしかないし…」
「しゃーねえ、自分で出すか」
「えっ？出すって？」

ザンクロウは具現のアークで布団と毛布を出した。

「んじゃお休み」
「ちよつと待ちなさい！？アンタ、床で寝るつもりなの！？」
「ベッドを出そうかと思っただけど、さすがに狭いからな。だから布団にしたんだ」
「あのね…まあいいわ」

そう言っただルイズは着替え始めた。

「おい、何勝手に着替えてんだ」
「寝るから着替えるのよ」
「俺がいる中で着替えるのかよ」
「使い魔に見られたって何とも思わないわ」

それはそれで傷つくぞ…。

するとルイズは、脱いだ制服と下着をこっちにほっぽった。

「ザンクロウ、それ明日になったら洗濯しておいて」
「洗濯って、んな面倒な事しなくてもこっすりゃ…」

ザンクロウは制服と下着に手をかざした。

すると、脱ぎたての制服と下着は、干し立ての制服と下着になった。

時のアークで簡単に仕上げた。

「すぐ終わるぞ」

「…ホント便利ね。アンタの魔法は…」

「その気になれば、部屋全部を汚れの無い状態にする事も出来るぜ」

「そうゆう魔法なの？時のアークって…」

そうゆうのじゃねえけどよ。

部屋を暗くして眠り始めたルイズ。

これからの俺のスタートって奴か。まっ、新しい人生だ。好きにやっ
つていこうかな。

そう思ったザンクローは眠りに落ちた。

ゼロのルイズと神殺しのザンクロウ（後書き）

便利な時と具現のアークでした。

今回はギーシュと決闘。といってもザンクロウの圧勝ですけどね。ちなみに、結果はどうゆう風な展開が良いですか？

例えば

1、ノーロさんに自分の毛を付けて鋼鉄化して、ギーシュのゴーレムの攻撃を効かなくして、時のアークでゴーレムをダメにしてからギーシュをブチのめす。

2、具現のアークでミストガンが持つてる杖を出し、同じく具現のアークでゴーレム（エルザ似）を作って圧倒させる。ついでにもう一体ゴーレム（今度はルーシィ似）を作ってギーシュの自信を喪失させる。

3、神のごとく振る舞いで、ギーシュにたっぷり恐怖を与えながらブチのめす。

皆さんはどうでしょう？

ザンク로우による一方的な決闘(前書き)

一 応朝食とか授業とか終わってから決闘です。

ザンクロウによる一方的な決闘

ザンクロウサイド

「取り合えず夜明け前に起きてみたんだが、この辺りの魔力を把握しておくか」

ザンクロウは、近くの森まで移動した。

「この木にしてみるか」

ザンクロウは大樹のオークを使って木の中に入った。

『へ〜、木の中って意外と落ち着くな〜。何かリラックスしてきたな〜…って落ち着いてる場合じゃなかったな！？この辺りの魔力はつと〜…』

ザンクロウは根をはり、学院周辺の土地を調べた。

『なるほど、この辺りの魔力は学院を中心にしてるんだな。制御するには時間がかかりそうだな』

ザンクロウは木から出て、学院へと戻った。

そしてルイズの部屋に戻った。

「さて、そろそろ起こす時間だな」

ザンクロウはルイズの寝ているベッドに近づいた。

「おいルイズ！朝だ！とつと起きろ！」

しかしルイズは無反応だった。

「そうかい、起こせと言われて起きないんじゃしゃーねえなあ」

ザンクロウはベッドに手をかざすと、ベッドが徐々に朽ちていき、崩壊した。

「ふぎやつ！？」

ベッドで寝ていたルイズは当然、真ん中から抜け落ちた。

「おし、起きたか？」

「何すんのよ！つてアンタ誰よ！？」

「おいコラ！人を呼び出しといて忘れんなよ！」

「ああ、昨日召喚したんだっけ？つて、私のベッドが壊れてるー！
」？

「さつさと起きねえからだ」

「ここまでする普通！？」

「すぐ直せるんだから良いだろ？」

そう言っただけで直ぐにベッドを修復させた。

「…やっぱり便利よねその魔法…」

「んで、起こしたら何をするんだ？」

「そうね、本来なら私の着替えをして貰うんだけど…」
「言っとくが断るぞ」

「だから、制服と下着だけ用意して。後は自分で着替えるから」
「分かった」

タンスの中から制服と下着を取り出してルイズに渡した。
そしてルイズの着替えが終わった。

「それじゃ食事に行くわよ。ついて来て」
「あいよ」

ルイズとザンクロウは部屋を出ると、隣から誰か出てきた様だ。
そこに現れたのは、胸元を開けたスタイル抜群な赤い髪の褐色肌の
女性だった。

へへ、良い体してんじゃねえか。

「おはようルイズ」
「おはようキュルケ…」

ルイズは、現れた女性に対して嫌そうに挨拶をした。

「貴女の使い魔ってそれ？」
「そうよ」
「あつはっは！ほんとに人間なのね！すごいじゃない！」

ルイズを小馬鹿にするような振る舞いをするムチムチ女。

「サモン・サーヴァントで平民を呼んじゃうなんて、貴女らしいわ。
さすがはゼロのルイズ」
「うるさいわね」

ザンクロウの実力を知っているとはいえ、何も知らない人にとって
は、ザンクロウは平民扱いだと言う事にルイズはどこか納得出来ず
にいた。

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って一発で呪文成功よ」

「あっそ」

ルイズは素っ気ない返事をした。

「どうせ使い魔にするなら、こつというのが良いわよねえ」。フレイム」

女は勝気な声で使い魔を呼んだ。

部屋からのっそりと出て来たのは、真っ赤な巨大トカゲが出てきた。まあ異世界なんだから、こんなのがいても不思議じゃないか。

「でかいトカゲだな」

ザンクローはしゃがりこんで、フレイムと呼ばれた使い魔を見た。

「あら、結構度胸があるようね」

「でかいだけで怖がるような感性は持ち合わせてないんでな」

そう言ったザンクローはフレイムに触ろうと手を伸ばすが、何故か数歩下がって唸っていた。

「あれ？フレイム、どうしたの？」

「あらあら、ザンクローに怖がってるのかしら？その火トカゲ」

何故かルイズがニヤケながらそう言った。

「どうしたお前？何もしねえからこつち来いよ」

ザンクロウはそう言うと、フレイルは少し近づいて来た。

「よしよし、良い子だ」

ザンクロウがフレイルの頭を撫でると、気持ち良さそうな声を上げた。

「あら珍しいわね。フレイルがあたし以外に懐くなんて？」

「こつゆうのでも、他の動物と変わんねえんだな」

「……………」

そんなやりとりを見て不機嫌になるルイズ。

「貴方、お名前は？」

「人に名を聞く時は、まず自分から名乗る方が礼儀だって聞いてるぜ？」

「あら？それもそうね、面白いわね貴方。あたしはキュルケ・フォーン・ツエルプストーよ。「微熱のキュルケ」とも言われてるわ」

「俺はザンクロウだ」

「じゃあザンクロウ、お先に失礼」

キュルケは去って行った。

「ザンクロウ……」

「ん？何だルイズ？」

「やけにキュルケと仲良く話してたわね？」

「お隣さんならある程度は仲良くするもんだろ？」

「ダメよ！特にキュルケとは絶対ダメよ！」

「うおっ！？どしたんだルイズ？そんなにいきり立てて？」

「とにかく、キュルケは絶対ダメだからね！行くわよ！」
「…お、おう」

あまりの気迫に驚いちまったな。そんなにあのキュルケって女に目くじら立ててんのかね？

ザンクロウはルイズについていった。

するとルイズは「あっ」と呟いた。

「そうだザンクロウ、あんた食事の時はどうしてるの？」

「神の所にいた時はメシの事なんか考えてなかったけど、人間界に来た時は何故か人間と同じ物を食わないといけなくなったからな」

一応らしく言わないとな。

「ふうん、要は私たちと変わらないって訳ね」

「まあ平たく言えばな」

そついやこつって、平民は下僕扱いなんだったな？……て事は、

「それだと、あんたの分は」言つとくが、使い魔だからって犬の様に這いつくばって少ないメシを食えってんなら断るぞ」わ、分かっているわよそれくらい！？」

する気だったみてえだったなコイツ。

「それだと何処で食べば良いんだよ？」

「そうね……そのメイドに訊いてみましょ」

ルイズは近くの黒髪のメイドに話しかけた。

「そのメイド、ちょっと良いかしら？」

「あつ、はい！何か御用ですか？」

「こいつの食事を用意してくれる？」

「えっ？そちらの方ですか？」

「よろしく」

「は、はい、こちらこそ！」

「じゃあ後はお願いね」

ルイズはそう言って食堂の方に向かった。

するとメイドは、ザンクロウの事を凝視し始めた。

「もしかして、昨日噂になってた方ですか？」

「噂？」

「はい。何でもミス・ヴァリエールが平民を召喚したとか」

「ああ、それ俺だ」

「やっぱり。貴族様の使い魔にされて大変だろうとは思いますが、困った事があつたらいつでも相談に乗りますよ」

「そりゃありがてえな。これからよろしくな」

「はい！」

それで俺は黒髪のメイド、シエスタと仲良くなり、厨房の方へと移動した。

中には気の会う連中がいて心地良かった。

ここのメシはすぐくうめえと言ったら。ここのシェフ、マルトーのオヤジに益々気に入られた。

腹も膨れて来たので、ルイズを待つ為に食堂の出入り口付近で待ってた。他の使い魔も主人を待っていた。俺って…こいつらと一緒になんだな…。

すると、ルイズが出てきた。

「待った？じゃあ行くわよ」

「どこ行くんだよ？」

「教室よ。授業があるからね」

「そっか、学院って言ってたしな。…ちょっと待て、何で俺も一緒に行くんだ？」

「使い魔を召喚したから、数日は使い魔と一緒に授業を受けて良い事になってるのよ」
「なるほど」

ザンクロウは納得してルイズの後をついていった。

教室に着くと、そこには使い魔を連れた生徒達がいた。

朝会ったキュルケの周りには男子で埋まっていた。

まあ解らなくもない。あのスタイルじゃなあ。

キュルケの隣にいた青い髪をした眼鏡のガキは、我関せずと言った具合に本を呼んでいた。つか、あいつが一番強いな。

ザンクロウは、青い髪の少女、タバサに警戒していた。

ルイズは自分の席に着くと、ザンクロウはその隣の床に座った。

すると、周りからクスクスと話声が聞こえてきた。

「見るよ。ルイズの奴、ほんとに平民を連れてるぜ」

「さすがは、ゼロのルイズだな」

「いくら失敗したからって、平民は無いよね」

「ほんとゼロねルイズは」

あからさまな陰口を叩きまくってるなこいつら。
でも気になる事はあるな。

「なあルイズ、さっきから周りが言ってる、ゼロのルイズって一体何なんだ？」

「…知らなくて良い事よ」

「ふうん」

ルイズの落ち込み様から見て、ゼロってのは中傷的なあだ名か何かそれ？

すると、紫のローブと帽子を着たおばさんが来た。

皆が席に着き始めたのを、教師の様だな。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュバルズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

やってきたおび…シュバルズは、教師らしく生徒達に挨拶をした。シュバルズが教室を見渡していると、ザンクロウを見た。

「おやおや、ミス・ヴァリエール。珍しい使い魔を召喚したものですね」

シュバルズの一言により、教室が笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できなかったからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

「違うわ！ちゃんと召喚したわよ！」

「嘘つくな！サモン・サーヴァントが出来なかったんだろう？」

ここまで言われるとカチンと来るもんだな。

ザンクロウは時のアークで、ルイズに中傷的な事を言った連中の椅子を老朽化させた。

「だあつ！？」

「ぎゃつ！？」

「うわっ!？」

皆は何が起こったのか、椅子が崩れた席を見始めた。
するとルイズは、ザンクロウに小声で問いかけた。

「ザンクロウ、これってアンタの仕業？」

「ああ、うるさいニワトリ共にお仕置きをやってた」

「…あんまり騒がない様にね…(それと…ありがと)」
「？」

ありがとの部分はかなり小声で言った為、ザンクロウには聞こえなかった。

新たな椅子を持ってきて、授業を再開させた。

「では皆さん、授業を始めましょう」

そして授業は、錬金の講義が行われた。

「私の二つ名は赤土のシュヴルーズです。これから一年、土系統の魔法を皆さんに講義しますわね。さて、魔法の四大系統はご存知です
ね？ミスタ・マリコルヌ」

「は、はい。ミセス・シュヴルーズ。「火」・「水」・「土」・「風」の四つです！」

「はいその通りです。今は失われた系統の「虚無」を合わせて五つの系統がある事は、皆さんも知ってるの通りです。その中で土の魔法は最も重要なポジションを占めていると私は考えます。これは私が土の系統を使うから、と言う訳ではありません」

シュヴルーズは咳払いをして続ける。

「つか、思いつきり自分の系統を自慢したいんじゃないのか？」

「土系統の魔法は、万物の組成を司ります。この魔法が無ければ、重要な金属も作り出せませんし、加工する事も出来ません。大きな石を切り出して建築する事も、農作物の収穫も今より手間取るでしょう。この様に、土系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのですよ」

シュヴルーズによる土系統の講義は、去年一年間のおさらいを兼ねていた。

この世界は魔法至上主義者が多いとは思ってたが、これほどとはな。少しは地球を見習えよ。

「今から皆さんには、土系統の魔法の基本である錬金の魔法を覚えて貰います。一年生の時に出来る様になった人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度おさらいする事に致しましょう」

シュヴルーズは教卓の上に石ころを置き、その石に向かって魔法を唱える。

すると、石ころは光りだし、光が治まるとピカピカ光る金属に変わっていた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ」

キュルケが目の色を変えて立ち上がった。

「いいえ、これは真鍮です。ゴールドを錬金出来るのは「スクウエア」クラスのメイジだけです。私はただの…」

シュヴルーズは、そこで勿体ぶる様に言葉を溜めて…。

「トライアングル」ですから」

ぜってえ自慢してるだろこのおばさん。

そっぴゃさっきから言ってるスクウエアとかトライアングルって何だ？

ザンクロウはルイズに訊いてみた。

「ルイズ」

「何よ、授業中でしょ」

「スクウエアとかトライアングルって何だ？」

「系統を足せる数の事よ。それでメイジのレベルが決まるの」

「系統を足す？」

「例えばね、土以外にも火等の系統を足せば、さらに強力な魔法になるの。種類が一つだけだと「ドット」、二つだと「ライン」になるのよ」

「つまり、使える系統が三つあるからトライアングルと？」

「そう。ちなみに、土・土・火と同じ系統があるなら、その系統がより強力になる」

「なるほど」

「ちなみにシユバルーズ先生みたいに、土、土、火の三つで、トライアングルメイジよ」

この世界の魔法の仕組みはそうなってるのか。ん？

「ちょっと待て、同じのが二つあるんだが、それはどうなるんだ？」

「その系統がより強くなるわ」

「つまり、あのおb…先生は、トライアングルだから協力だと？」

「その通りよ」

「ふん…んじゃあルイズはいくつ足せるんだ？」

それを言うと、ルイズは黙ってしまった。
するとシュバルズはルイズを叱った。

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！？」

「授業中に私語は慎みなさい！」

「すみません……」

「おしゃべりをする暇があるのなら、貴女達にやって貰いましょう」
「え、私？」

「そうです。ここにある石ころを使って、望む金属に変えてもらいなさい」

周りは騒然としていた。

ん、何だ？急に皆慌てだしたな？あつ、さっきの青い髪のカキが出て行きやがった？

しかし、ルイズは立ち上がらなかった。

「ご指名だるルイズ。行って来いよ」

「ミス・ヴァリエール、どうしたのですか」

シュバルズがそう言った瞬間、生徒たちの顔が真っ青になった。

「あの先生、危険ですから止めておいた方がいいですわ」

「危険？どういう事です？」

キュルケが止める様に言うと、周りが揃って頷いた。

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。あまり実技の成績が良くない事は存じています。しかし、座学に関しては学年首席であると、非常な努力家である事も存じて

おります。さあミス・ヴァリエール、気にせずに行ってごらん下さい。数多くの失敗から、成功は生まれるものです。」

「ルイズ、止めて！」

キュルケが蒼白な顔で言う。

するとルイズは緊張した顔で立ちあがった。

「やります！」

そう言うと、ルイズは教卓の前まで歩いて行った。

「よろしい。ではミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

そう言われルイズは目を閉じ、短くルーンを唱えようとした。

その瞬間、クラス中の生徒達が一斉に机の下に避難した。

「あれ？何で皆隠れてんだ？」

そしてルイズは、石ころに向けて杖を振った。

その瞬間、机の上にあった石ころが爆発した。

「どわあっ!？」

ザンクロウは突然の爆発ですっ転んだ。

教室で爆発が起こった事で、使い魔達はすぐ慌てだした。

良く見ればシュバルズも、すぐ近くで爆発した為、吹き飛ばされてのびていた。

「だから言ったのよ！あいつにやらせるなって！」

「もう！ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「俺のラッキーが蛇に喰われた！？ラッキーが！？」

ルイズを非難し続ける生徒達に対して、ルイズは…。

「ちょっと失敗みたいね」

そう言ったら…。

「ちょっとじゃないだろ！ゼロのルイズ！」

「いつだって成功の確率ほとんどゼロじゃないかよ！」

それを聞いたザンクロウは、

「なるほど、あいつがゼロのルイズって呼ばれる訳か」

と思っていた。

コルベールサイド

コルベールは、学院の図書館の教師のみ閲覧を許されている「フェニアのライブラリー」の中で、ザンクロウのルーンについて調べていた。

彼が調べているのは、「始租ブリミルの使い魔たち」だった。そこで彼が目にした物は、

「これだ！しかしこれは…念の為、学院長に報告しないと」

コルベールは、始租ブリミルの使い魔たちの本を抱えて、学院室に

向かった。

ルイズサイド

ルイズは、先程滅茶苦茶にした教室の掃除をしていた。どうしよう、これでザンクロウは、私が無能のメイジだってバカにされる…。

神を自称しているんだもん、その主人が魔法の一つも出来ないなんて、呆れるに決まってる…。

すると、ザンクロウがルイズに近づいた。

「なあルイズ、お前って…」

「!?!」

うう、やっぱり来た…。

ルイズは、ザンクロウの暴言を黙って待っていたが、言ってきたのは予想もして無かった事だった。

「大樹のアークを使ったのか？」

「は？」

大樹のアーク？何で？

「だって、あんな見事な爆発魔法を扱ってるんだからな。お前も神の魔法の大樹のアークを使えんのかなって…」

「違うわよ！」

「うおっ!?!」

なに？あいつ、私の失敗を神の魔法と勘違いしてた訳!?!何でよ!

「何で違うんだ？」

「聞いて、アンタの所じゃどうゆうのか知らないけど、こっちは失敗なのよ！」

「る、ルイズ？」

何で言うのよ！？あいつは良い具合に勘違いしてるのに…でも、そんなの意味無いよね…。

「私はね、どんな魔法を使っても、簡単なコモンマジックでも、全部爆発しちゃうのよ。系統魔法がどんなのかすら解らないから、私の属性が無いの。足せる系統が無い、だから皆私の事をゼロと呼ぶのよ…」

ルイズは、ザンクロウに愚痴り出した。

「どんなに頑張っても爆発、どれだけ集中しても爆発、何をしても爆発になっちゃうのよ…」

私、何言ってるんだろ…。これじゃザンクロウが愛想尽かされるじゃない…。でも、止まらない…。

「座学は優秀でも、魔法がダメじゃ意味が無いの。おかげで皆から馬鹿にされて、ゼロと呼ばれるの。私は…期待外れのメイジなの…」

ルイズは俯いてしまった。

ザンクロウはルイズに手を添えた。

「ルイズ…」

ルイズはこの後来る暴言などを覚悟して顔を上げると、そこには、

「そうか…辛かったんだな…苦労してたんだなルイズ…」

号泣していたザンクロウの姿だった。

「へっ？」

思わず素っ頓狂な返事をするルイズ。

「だがなルイズ、決して諦めんじゃねえ！諦めなけりゃあきつと良い事があらあ！」

「ちよっ！？どうしたのザンクロウ！？」

「皆まで言うな！おめえがそんな苦労を抱えてちやあままならねえ！俺の力が必要な時はいつでも言え！おめえの力になってやらあ！」

同情したザンクロウは、てやんでえ口調でルイズを励ました。

啞然とするルイズだが、

「あ、ありがとう…」

ザンクロウに礼を言った。

何よ、嬉しい事言ってくれるじゃない。

ルイズはザンクロウに感謝していた。

「んじゃあ早速…時のアーク、レストア！」

すると、教室が徐々に元通りになっていった。

「よっしやあー！」

「ちょ、ちよつとザンク로우!？」

「どうしたルイズ?」

「魔法を使つての修理は禁止されてるのよ!？」

「それはルイズに対してだろ?俺には別に咎められて無えしな」

「あつ、そっか」

確かに私に言われてた事だし、ザンク로우の事は平民と思ひ込んでるみたいだし、良いのかな?

ルイズとザンク로우は、教室を出た。

オスマンサイド

トリステイン魔法学院の学院長を務めるオスマン氏は退屈をもてあましていた。

しばらくぼんやりと鼻毛を抜いていたが、しばらくして引き出しから水ギセルを取り出した。

しかし、吸おうと口に近付ける前に秘書のミス・ロングビルが羽ペンを振り、水ギセルを取り上げる。

「年寄りの楽しみを取り上げて、楽しいかね?ミス…」

「あなたの健康を管理するのも、わたくしの仕事なのですわ」

オスマン氏は立ち上がり、椅子に座ったロングビルの後ろに立つ。

「こつ平和な日々が続くと、時間の過ごし方と言うものが、何より重要な問題になってくるのじゃよ」

立派に聞こえるが、要するに暇なのだ。

「オールド・オスマン」

「なんじゃ？ミス……」

「暇だからといって、わたくしのお尻を撫でるのは止めて下さい」

そんなロングビルをよそに、オスマンはその辺をふらふらと歩き始める。

「都合が悪くなるとボケた振りをするのもやめてください」

どこまでも冷静な声で、ミス・ロングビルが言った。オスマンはため息をついた。深く、苦悩が刻まれたため息であった。

「真実はどこにあるのじゃろうな、考えた事はあるかね？ミス……」

「さあ、私には解りません。ですが少なくとも私のスカートの中には無いので、机の下にネズミを忍ばせるのを止めて下さい」

ミス・ロングビルのセリフに、悪びれる様子もなく自らの使い魔の名を呼ぶ。

「気を許せる友達はお前だけじゃ、モートソグニル」

机の下から小さなハツカネズミが現れ、オスマン氏の肩に乗っかる。オスマン氏はナッツを手に取り、使い魔に問う。

「まずは報告じゃ。モートソグニル」

「ちゅうちゅう」

「そうか、白か。純白か。うむ。しかし、ミス・ロングビルは黒に限る。そうは思わんかね。可愛いモートソグニルや」

ミス・ロングビルが立ち上がる。

「オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

「今度やったら、王室に報告します」

はあー、とため息をつくオスマン。

「カーツ！たかが下着を覗かれたぐらいでカッコしなさんな。そんな風だから、婚期を逃すのじゃ」

ミス・ロングビルの中で何かが切れた。

彼女はオスマンを蹴りつけようと足を上げ、振り下ろす瞬間。

「オールド・オスマン！」

勢いよくドアが開かれ、コルベールが飛び込んできた。

「なんじゃね？」

ミス・ロングビルは何事もなかったように机に座り、オスマン氏は腕を後ろに組んで、重々しくコルベールを迎えた。凄まじい早業だった。

「たた、大変です！」

「大変な事などあるものか。すべては小事じゃ」

「ここ、これを見てください」

コルベールは、持ってきた書物を手渡した。

「これは、始租ブリミルの使い魔たちではないか。まーたこのような古臭い文献など漁っておったのか。ミスタ：なんだっけ？」

「コルベールです！お忘れですか！」

「そうそう、そんな名前だったな。君はどうも早口でいかんよ。で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「これも見てください！」

もう一つ手渡したのは、サイトとアデルの手に現れたルーンのスケットチだ。

それを見た瞬間、オスマンの表情が変わる。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

ミス・ロングビルは立ち上がり、部屋を出ていく。彼女の退室を見届け、オスマン氏は口を開いた。

「詳しく説明するんじゃ。ミスタ・コルベール」

ザンク로우サイド

ルイズがあんな苦労人だとはな。

しかしあの爆発が失敗とはな、大樹のアークのブレビーが使えるのかと思っただぜ。

一応使い魔って事で協力すっかねえ。

ルイズが昼食に行ったので、ザンク로우は厨房を目指していた。

「腹減ったな。メシ食いに行かねえと」

「あつ、ザンク로우さん」

「ん？」

ザンクロウは声をかけられた方に向くと、シエスタがいた。

「ようシエスタ」

「ザンクロウさんはお昼ですか？」

「ああ、これから厨房に行こうと思ってな。またメシごちになるぜ」「分かりました」

俺はシエスタと一緒に厨房に向かった。

厨房に着いたが、慌ただしかった。

「何だこの騒ぎは？」

「お昼は貴族の方も食べに来ますから、その分忙しいんですよ」

「ふうん、よし！俺も手伝うぜ！」

「えっ！？いいですよザンクロウさん！？」

「働かざる者食うべからず！ここでただメシ食らってるよりはマシだ、手伝うぜ」

「…じゃあ、お願いしますね」

「おう！いくらでも来い！」

こうしてザンクロウは、シエスタ達の手伝いをし始めた。

デザート運びをピンクの髪の女の所だなっと。って、ルイズだよ。

「待たせたなルイズ」

「って、ザンクロウ！？アンタ何してるの！？」

「昼飯前で慌ただしくてな、俺の分作る暇無えから、手伝ってんだ」

「そ、そうなの？」

「っー訳だから、次のを運ばなくちゃいけねえから、俺行くわ」

「そう、粗相のない様にね」

「分ーってるって」

次のを運ぼうとしてると、何やら騒がしくなっていた。騒ぎのある方を見ると、シエスタが頭を何度も下げながら謝っていた。

シエスタを叱ってる奴は、見るからにキザそうな奴だった。しかも、両頬にはビンタにでもあった様に赤い手形があった。騒いでる所から少し離れた所に、泣いてる二人の女（片方は大人しそうで、もう片方は沸点低そう）が離れて行っていた。なるほど、要はあのキザの奴二股してて、それがバレたのを近くにあったシエスタに当たってるんだな。

「小つちええ奴だな…」

ザンクロウは騒ぎのある方へ向かった。

「申し訳ございません!? 申し訳ございません!?」

「謝れば良いってものじゃないよ君、二人を泣かせておいてどう落とし前w「おつと悪い」「わっ!?!」

「えっ!?!」

ザンクロウはワザとらしくぶつかり、キザな男は倒れた。するとキザな男は立ち上がり、ザンクロウに指を差した。

「こら!ちゃんと注意して歩け!」

「だから悪いって言ったじゃんか」

「それが人に謝る態度かね給仕君?」

「さつきから悪いって言ってるじゃんか。それに俺は給仕じゃねえし」

「ん?ああ、君は確か…あのゼロのルイズが呼び出した平民だった

な。貴族をつやm」二股してる様な奴なんざ、敬う必要何か無えだろ」なっ!？」

「ざ、ザンク로우さん…!？」

するとキザな男の目が光った。

「どうやら君は、貴族に対する礼儀を知らない様だね？」

「生憎そんなのは縁の無い所から来たもんでな」

「良かるう！君に礼儀と言う物を教えてやろう。丁度良い腹こなしだ」

「面白そうだな。昼飯前の良い運動になるな」

一触即発な空気となっていた。

「で、ここでやんのか？」

「ふん、貴族の食卓を平民の血で汚せるか！ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終えたら来たまえ」

そう言つてキザな奴は去つて行つた。

周りの連中は良い暇潰しが出来たと思つてキザな男、ギーシュの後を追つた。

ブルブルと震えて蹲つてるシエスタを介抱しようとしたら、

「ざ、ザンク로우さん…」

「大丈夫かシエスタ？」

「あ、あなた、殺されちゃう…」

「は？」

「貴族を本気で怒らせたら…殺されちゃう!？」

「お、おい、シエスタ!？」

シエスタは何処かへと走り去ってしまった。

あんなへナチヨコに殺されるって？舐めてるとしか言いようが無いんだけど？

すると、ルイズが近づいて来た。

「ちょちょちょ、ちょっとアンタ！？なに決闘の約束なんかしてるのよ！？」

「ん？ああルイズ」

「ああルイズじゃないわよ！？あんたギーシュを殺す気！？」

「あんな殴る価値も無い奴に使う拳は無いから、デコピンで殺るつもりだが？」

「デコピン！？てか、やるの部分が「殺」になってるんだけど！？とにかく殺っちゃダメよ！？」

ケンカ何て地球にいた頃はしょっちゅうだったから大丈夫だったの。

「分かった。手加減してデコピン喰らわしてやるからよ」

「手加減で、どれくらい？」

「そうだな…このテーブルが軽く吹っ飛ぶくらいか？」

「充分致命傷じゃない！？」

「あーゆう思い上がった奴はな、一度コテンパンにしなきゃ治らねえからよ。んじゃ、ケーキ配って行くとするか」

「ちょっ、絶對手加減しなさいよね！」

ケーキ配り終えたから、近くにいたデブ、マリコルヌにヴェストリの広場の場所を教えて貰い、そこに向かった。

オスマンサイド

コルベールは、図書館での事をオスマンに説明した。

「なるほどのー。それで始祖ブリミルの使い魔、第四の使い魔に行き着いたという訳じゃね？」

「そうです！あの少年の胸に刻まれたルーンは、伝説の使い魔、第四の使い魔に刻まれていたものと全く同じであります！」

「で、君の結論は？」

「あの少年は、恐らく第四の使い魔です！これが大事じゃなくて、何なんですか！オールド・オスマン！」

「ふむ：確かに、ルーンが同じじゃ。ルーンが同じという事は、ただの平民だったその少年は始祖の使い魔、しかも最強に位置する第四の使い魔になった、という事になるんじゃないだろうか」

「どうでしょう」

「しかし、それだけで、そう決めつけるのは早計かもしれん」

「それもそうですな」

そんな時、ドアからノックの音が聞こえた。

「誰じゃ？」

「私です。オールド・オスマン」

その声はロングビルだった。

「何じゃ」

「ヴェストリの広場で決闘をしている生徒がいる様です。大騒ぎになってます。止めに入った教師がいましたが、生徒たちに邪魔されて止められない様です」

「まったく、暇を持て余した貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい。で、誰が暴れておるんだね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「あのグラモンとこのバカ息子が。親父も色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。おおかた女の子の取り合いじやろう。相手は誰じゃ？」

「それが、メイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の少年の一人のようです。教師たちは、決闘を止めるために「眠りの鐘」の使用許可を求めています」

「アホか。たかが子供のケンカを止めるのに、秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」
「わかりました」

そう言ってミス・ロングビルが離れていく。それを確認し、今度はコルベールが口を開いた。

「オールド・オスマン」
「うむ」

オスマンは杖を振る。すると壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリア広場の様子が映し出された。

ザンク로우サイド

ヴェストリアの広場には、既に待っていたギーシュが高らかと宣言していた。

「諸君、決闘だ！」

ザンク로우が広場に来た時、そう言ってギーシュが薔薇の造花を掲げた。

周りからは歓声が沸き起こる。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔の平民だ！」

ギーシュは腕を振って歓声に答えている。
それからやっとなんくろうの方を向いた。

「とりあえず、逃げずに来た事は褒めてやろうじゃないか」

「御託はいいから、とっとと始めろよ」

「せつかちだね。では、始めるか！」

ギーシュは持っていた薔薇を振り、一枚の花弁が地面に落ちると、
そこから甲冑を着た女騎士の形をした人形が出てきた。

「お！？」

「言い忘れていたが、僕の二つ名は「青銅」。「青銅のギーシュ」
だ！従って青銅のゴーレム、「ワルクューレ」がお相手するよ」

「良いねえ。掛かって来やがれ！！」

ワルクューレがザンクろうに向けて突進し、その右手の拳で殴りか
かった。

誰もがザンクろうが吹っ飛ぶかダメージを負う姿を予想してたが、
その予想は大きく外れた。

バキッ

なんと、ワルクューレの拳の方がイカレていたのだった。

「なっ！？ワルクューレの腕が！？」

ふう〜、事前に対応策を作っという正解だったぜ。

ザンクローは、ヴェストリの広場に着く直前に、神の魔法の一つ、丑の刻参りの時に使う人形、ノーロさんに自分の髪を付けておいたのだった。

そうする事で、ノーロさんの材質を鋼鉄に変えておけば、目に見えない鎧を纏ってる状態になっていたのだった。

「（全然痛く無いぜ）んで、何かしたのか？」

「き、効いてないだー!?」

ザンクローは、ワルキューレの頭に手を乗つけると、時のアークでワルキューレの体を脆くしていった。

「あ、あれ？ワルキューレ、どうしたんだ？」

ギーシュは不思議に思っていた。

そしてザンクローは、思いつきワルキューレを押し潰した。

「ドリヤアアーツ!!」

グシヤッ

と見事に頭から潰れたワルキューレだった物が出来た。

「なっ!?ワルキューレが!？」

「どうした?もうお終いか？」

「くっ、まだまだ!」

ギーシュは更に6体のワルキューレを出したが、同じ様に時のアークで脆くして、叩きのめしていった。

「ば、バカな!？」

「さてと…」

ザンクロウはギーシュの下に行った。

「ひっ!？ま、参っ「そりやっ!」タバハアツ!？」

ビシッ

ギーシュが降参する前に、ザンクロウが鋼鉄状態でデコピンした為に、ギーシュが少し吹っ飛んで気を失っていた。

「こんなところかな？さって、良い運動になったな。昼飯にするか」

そう言ってザンクロウは、厨房の方へと向かった。

周りにいる連中は、ザンクロウの行動に啞然としていた。

オスマンサイド

決闘の様子を遠見の鏡で見ていたオスマンとコルベールは、顔を見合わせた。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいましたが…」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低いドットメイジですが、それでもただの平民に後れを取るとは思えません。やはり、第四の使い魔の能力でしょうか!？」

「うむむ…」

「オールド・オスマン。さっそく王室に報告して、指示を仰がない事には…」

「それには及ばん！」

オスマンは、重々しく頷いた。

「どうしてですか！？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った始祖の最強の使い魔！」

「ミスタ・コルベール。第四の使い魔はただの使い魔ではない」

「その通りです。始祖ブリミルの用いた第四の使い魔。その姿形、能力は他のと比べて記述がありませんが…」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、使い魔が四体いたと言われていた。

その中でも、最強と謳われたのが、名も無き四番目の使い魔！」

オスマンの言葉をコルベールが続ける。

「神の盾ガンダールヴ、神の笛ヴィンダールヴ、神の頭脳ミヨズニトニルン、そして、あまりに強力過ぎたが為に、歴史から抹消された第四の使い魔…」

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その少年は、本当にただの人間だったのかね？」

「それなんです…」

「ん？どうしたのじゃ？」

「ミス・ヴァリエールが呼び出した際に、念の為ディティクト・マジックで確かめたのですが、彼からは膨大な魔力を感じました…」

「何じゃと！？詳しく話してくれ」

「はい、彼からは我々とは違う異質な魔力を感じました」

「そんな少年を第四の使い魔にしたのは、誰なんじゃね？」

「ミス・ヴァリエールですが…」

「彼女は優秀なメイジなのかね？」

「いえ、というか、むしろ無能というか…」

「さて、その2つが謎じゃ」

「ですね」

「無能なメイジと契約した、膨大な異質の魔力を持つ少年が何故第四の使い魔になったのか。まったく謎じゃ。理由が見えん」

「そうですね……」

「とにかく、王室のボンクラ共に第四の使い魔とその主人を渡すわけにはいくまい。そんなオモチャを与えてしまつては、また戦でも引き起こすじやろうて。宮廷で暇をもてあましている連中はまったく、戦が好きじゃからな」

「ははあ。学園長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

タバササイド

あの男、ザンクロウと言っていた。

彼が攻撃する瞬間、ゴーレムが勝手に壊れて行くのが見えた。

あの男が何かしたのは確かだと思う。でも確証が無い。

この事を言っても白を切られるだけ。少し、あの男を観察してみよう。

「ねえタバサ」

「なに？」

「彼つてすごいと思わない？ゴーレムを素手で倒しちゃうなんて！ヴァリエールの使い魔にしておくには勿体無いわ！待っててねダーリン！必ずあなたをオトしてみせるわ！」

またキュルケは、いつもの癖が出たみたい。

ザンクローによる一方的な決闘（後書き）

ギーシュって、フェアリーテイルで例えると、青銅の造形魔導士になると思います。

次回は買い物：についてはどうしようかと考えてますが、キュルケの誘惑があります。

デルフについてはどうしますか？

1、買いに行くイベントを起こさない。（アルビオンの武器屋の方で売られているのをサイトが買った）

2、買っていくが、7万を相手にした後、ウエストウッドでサイトに出会って、デルフを渡す。

どちらが良いでしょうか？

キュルケの誘惑とデルフ購入と泥棒騒ぎ（前書き）

ギーシュとの決闘から四日ほど経った。

最近仕事が忙しくなったのか、書く暇がありませんでした。

キュルケの誘惑とデルフ購入と泥棒騒ぎ

ザンク로우サイド

ここ数日で色々俺の待遇が変わってきたな。

他の貴族達は俺を見る度に何か怯えた感じに見えた気がしたからルイズに相談してみると、周りの連中は俺の事を「メイジ殺し」と思ってるらしい。神殺しなだけど俺…。

厨房にいた連中は、俺の事を尊敬の眼差しで見ってきたからシエスタに聞いてみたら、この間の決闘でこの学院にいる平民は皆俺のファンになったらしい。そんでもってオヤっさん（マルトー）に、「我が拳」って呼んでいたのは、素手で貴族に立ち向かった勇氣ある平民だからって言っていた。後：オヤジ趣味は無いからキスするのだけは止める！

んでシエスタは、あの場から逃げた事を謝ってきたが、別に気にしてないと答えたら、何故か赤い顔してありがとうって言うてくれた。それから、ガキとキュルケの使い魔の火トカゲ（フレイム）が俺に尾行している事に気付いたが、あまり気にしない事にした。

そんなのが数日続いていた。

取り合えず、毎朝日課となっている大樹のアークで学院の魔力を制御する作業を始めていた。

今のところ3割制御出来る様になった。

しかし、ここで思いもよらない事が起こった。

「あっ!?!」

学院周辺に自分の根を張っている作業を終えて、学院から少し離れた森の木から出ると、その上空にはなんと、青いドラゴンにのったガキがいた。

すると、ドラゴンに乗ったガキは俺の前に降りた。
やべえな、見られちまったぜ…。

「貴方は何者？」

「ノーコメントで」

「木の中に溶ける様に入って、そして同じ様に出てきたのを目撃した」

つまり最初っから見てた訳か、気付かなかったぜ。

「答えて、貴方は何者？」

「言っただうするんだ？」

「貴方が何者が知りたいだけ」

このガキは苦手だな、何考えてるのかまったく読めねえな…。

「お前に解るとは思えねえが？」

「それでも答えて」

仕方ねえ、話すか。

ザンクロウはため息をついた。

「信じる信じないはお前の勝手だぞ」

「分かった」

取り合えずこのガキ、タバサに俺が神だという事を話した。
ついで自己紹介もした。

「神？」

「ああ、それも同族殺し、神殺しの異名を持つ」

「神殺し？」

「俺は神を滅ぼす力を持っているからな」

タバサは少し考えていた。

何を考えているんだこいつ？

「この間使ってたのは貴方の力？」

「この間って？」

「決闘の時、ゴーレムが勝手に壊れたのを見た」

「へえ、良く分かったな。あれは時のアークつつつてな、物体の時

間を操る事が出来るんだ」

「それでゴーレムを老朽化させた。それだけしか使えないの？」

「それだけじゃねえ、普通の神が使う様な事も出来る」

「例えば？」

「そうだな……」

ザンクロウは具現のアークで、タバサが持つてるのと似た様な杖を創った。

「こんなのか」

「！？それは……」

「具現のアーク、俺が望んだ物を創造する力だ」

「！？望んだ物……！」

ザンクロウは杖を消した後、タバサはじっとザンクロウを見つめた。

「なんだよ」

「その力、私にも使えたらと思っただけ……」

「無理だな。これは神の魔法だ。人間が使える物じゃない」

「……そう……」

何だこの落ち込み様は？何か欲しい物があつたのか？

ぐう

それより、腹が減つちまつたな。

確かゴツドスレイヤーって、同じ属性の物は食べられるんだっけか？

「なあタバサ、お前の得意な魔法は何だ？」

「？…風」

「風か、だったらその風、俺に思いっきりぶつけてみる」

「何故？」

「腹が減つたからな。腹ごしらえをしようと思ってな」

「…意味が分からない？」

「とにかくやってくれ」

「？…分かった」

タバサはザンクロウに向けて「エア・ハンマー」を放つたが、

「ハアアアアアアアッ！」

ザンクロウはエア・ハンマーを吸い込んだ。

「！？」

さすがのタバサも驚愕していた。

「ぷはあゝ、美味え」

「風を…食べた？」

「ああ、正確には魔法をな。他にも火とか雷とかも食えるぜ」

「それが神の食事？」

「まあな。でも、こっちに来てからは人間が食う物も食ってるぜ」
「そう」

しかし妙だな、さっきの奴くらいなら軽く食事をした感じだと思っただのに、何故か腹が半分くらい膨らんだような？そんなに魔力が強いのかこいつ？

まあいいや、腹も少し膨れたし、そろそろ帰るか。
するとタバサは、

「貴方の力に、人を癒す力はある？」

「ん、治癒魔法の事か？そんなのお前らでも使えるだろ？」

「確かに水の使い手なら使える、でも治療するのにも限界がある」

「なるほど、神である俺には、その限界は無いんじゃないかって言いたいのか？」

タバサはコクリと頷いた。

「確かに俺は治癒魔法を使えるが、そんなに使ってないから良く解らんからな」

「そう…」

「精々死ぬ寸前の奴を時間かけて全快にしたり、病気やら毒やらも治療したぐらいだからな」

「毒の治療も！」

「うをつ！？」

タバサが急に近寄って来た事に驚くザンクロウ。

「いきなり何だ！？」

「ごめんなさい。でも、気になったから」

「毒の治療でか？」

タバサはコクリと頷いた。

「誰か毒を治療したい奴がいんのか？」

タバサはドキリとしながら頷いた。

「何でだ？」

「…普通の毒じゃないから、並の水の使い手じゃ手が出せないほど強力…」

「それで俺の力なら治せるかもってか？」

「そう」

なるほど、だけどな…。

「今の俺はルイズの使い魔だ。ルイズの許可が無い以上、そうゆうのはしないからな」

「…そう…」

すごく落ち込んでるな、おい。

「そんなに俺の力を使いたいんなら、ルイズに言や良いじゃねえか？」

「私の勝手に迷惑をかけたくない」

「まっ、俺の力が必要になったらいつでもルイズに言いな。そんな時は力になるぜ」

「ありがとう」

タバサにそう言った後、俺は学院でメシを食いに帰った。

タバササイド

只者じゃないと思っていただけ、まさか神を名乗るとは思わなかった。

でも、それに似合った力を持っている事に納得した。彼の力を使えば、母様を救えるかもしれない。

「お姉さま、本当に良かったのね？」

「こればかりは仕方ない」

今話しかけたのは私の使い魔、韻竜のシルフィード。人間にとっては絶滅したドラゴンとも言われている。

「きゅい、でもお姉さま、シルフィはあの人に頼むのは反対なのね。精霊を食べる様な人は嫌いなものね」

「精霊を…食べる？」

どういう事だろうとタバサは思った。

「さっきお姉さまのエア・ハンマーを食べた時に、近くにいた小さな精霊と一緒に食べたのね」

「！？」

魔法を食べる事だけでも驚いたのに、さらに精霊まで！？彼は精霊まで食べられるの！？

タバサはザンクロウの食事に疑問を持った。

ロングビルサイド

私は今、宝物庫の前でアン・ロックをかけたが、うんともすんともいわなかった。

えっ、何でそんな事してるのかつて？

そりゃああたしが世間に名を轟かしてる土くれのフーケは、あたしの事だからね。

ここの宝を狙ってこの学院に潜り込んだけど、手強いね。

「まあ、ここの錠前にアン・ロックが通用するとは思ってないけどね」

くすりと妖艶に笑うと、ロングビルは自分の得意な呪文を唱え始めた。

それは錬金の呪文であった。朗々と呪文を唱え、分厚い鉄のドアに向かって杖を振る。魔法は扉に届いたはずだが…しばらく待っても変わった所は見られない。

「スクウェアクラスのメイジが固定化の呪文をかけているみたいね」

ロングビルは呟いた。「固定化」の呪文は、物質の酸化や腐敗を防ぐ呪文である。これをかけられた物質は、あらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続けるのだった。固定化をかけられた物質には錬金の呪文も効力を失う。呪文をかけたメイジが、固定化をかけたメイジの実力を上回れば、その限りではないが。

しかし、この鉄の扉に固定化の呪文をかけたメイジは、相当強力なメイジらしい。土系統のエキスパートであるロングビルの錬金を受けつけないのだから。

「つたく、これじゃ手の着けようが…誰か来る!？」

ロングビルは杖を縮めてポケットに仕舞った。

現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここで何を？」

コルベールは間の抜けた声で尋ねた。ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが…」

「はあ…それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで一日がかりですよ。何せここにはお宝ガラクタひっくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしようね」

目的の物もガラクタじゃないだろうね？

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルは微笑んだ。

「それが…ご就寝中なのです。まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし…」

「なるほど、ご就寝中ですか。あのエロジジ…じゃなかった、オールド・オスマンは寝るとなかなか起きませんからな。では、僕も後で伺う事にしましょう」

コルベールは歩き出した。それからふと立ち止まり、振り向いた。

「その…ミス・ロングビル」

「なんでしょう？」

照れくさそうに、コルベールは口を開いた。

「もし、よろしかったら、なんです……。昼食をご一緒にいかがですか？」

ロングビルは少し考えた後、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

2人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ちよつと碎けた言葉遣いになって、ロングビルが話しかけた。

「は、はい？なんでしょう」

自分の誘いがあっさりと受け入れられた事に気をよくしたコルベールは、跳ねるような調子で答えた。

「宝物庫の中に、入ったことはありませんか？」

「ありますとも」

「では、「破壊の杖」をご存知？」

「ああ…あれは、奇妙な形をしておりましたなあ」

ロングビルの目が光った。

「と、申されますか？」

「説明のしようがありません。奇妙としか…はい。それより、なにをお召し上がりになりますか？本日のメニューは、ヒラメの香草包

みですが…なに、僕はコック長のマルトー殿に顔が利きますから、僕が一言言えば、世界の珍味、美味を…」

「ミスタ」

ロングビルはコルベールのおしゃべりを遮った。

「は、はい？」

「しかし、宝物庫は立派な造りですわね。あれでは、どんなメイジを連れて来ても、開けるのは不可能でしょうね」

「そうですね。メイジには、開けるのは不可能かと思えます。なんでも、スクウエアクラスのメイジが何人も集まって、あらゆる呪文に対抗できるように設計したそうですから」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらつしやる」

ロングビルは、コルベールを頼もしげに見つめた。

「え？いや…はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので…研究一筋と申しましょうか。はは、おかげでこの年になっても独身でして…はい」

「ミスタ・コルベールのおそばにいられる女性は幸せでしょうね。だって、誰も知らないような事を、たくさん教えてくださるんですから…」

ロングビルは、うつとりとした目でコルベールを見つめた。

「いや！もう！からかってはいけませんよ！はい！」

コルベールはかちこちに緊張しながら、禿げ上がった額の汗を拭いた。それから、真剣な顔で、ミス・ロングビルの顔を覗き込んだ。

「ミス・ロングビル。次のユルの曜日に開かれる、フリッグの舞踏会はご存知ですか？」

「なんですの？それは」

「はあ、貴方はここに来てまだ二ヶ月ほどでしたな。その、なんてことはない、ただのパーティーです。ただ、ここで一緒に踊ったカップルは、結ばれるのかなんとか！そんな伝説がありました！はい！」

「それで？」

ロングビルはにっこりと笑って促した。

「その…もしよろしければ、僕と踊りませんかと、そういうことではいい」

「喜んで。舞踏会も素敵ですが、それより、もっと宝物庫について知りたいわ。私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

コルベールはロングビルの気を引きたい一心で、頭の中を探った。宝物庫、宝物庫と…。

やっと、ロングビルの興味を引けそうな話を見つけたコルベールは、もったいぶって話し始めた。

「では、ちよつとご披露いたしましょう。たいした話ではないのですが…」

「ぜひとも伺いたいわ」

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが、一つだけ弱点があると思うのですよ」

「はあ…興味深いお話ですわ」

「それは…物理的な力です」

「…物理的な力？」

「そうですね！例えば、まあ、そんな事はありえないのですが、
「巨大なゴーレム」が…」
「巨大なゴーレムが…？」

コルベールは得意気に、ロングビルに自説を語った。聞き終わった後、ロングビルは満足げに微笑んだ。

「大変興味深いお話でしたわ。ミスタ・コルベール」

これは運が向いて来たね。巨大ゴーレムなら、宝物庫を破壊できるね。

ザンクロウサイド

…暇だ。やる事が無え。

ルイズに言ったら、「だったら部屋の掃除と洗濯をしなさい」って言われたけど、時のアークで部屋も服もピカピカにしたからマジでやる事が無え。

暇だからシエスタの所に行ってみたら、また慌ただしかったので、手伝いをした。良い暇潰しになったから、次からも手伝いに行くと言ったら、シエスタは喜んでくれた。

夜まで手伝い（ルイズにはちゃんと許可を取った）をして、ルイズの部屋に戻ろうとしたら、フレームが待ち伏せしていた。

「ん？キュルケの使い魔のフレームか、何の用だ？」

するとフレームは、ザンクロウに手招きをしていた。

「何だ、こっちに来たってか？」

フレイムは頷いた。

「キュルケが俺に用があるのか？」

フレイムは再度頷いた。

「しゃーねえな」

ザンクロウはキュルケの部屋の前に来た。

コンコン

ザンクロウは扉をノックした。

「キュルケ、何か用か？」

「中に入って」

ザンクロウは部屋の中に入って行った。

部屋は真っ暗だった。

「扉を閉めて」

ザンクロウは言われた通りにした。

「ようこそ。こちらにいらっしやい」

「真っ暗だな」

キュルケは指を弾くと、部屋にあった蝋燭に火が灯った。

「うおっ!？」

ザンクロウはキュルケの着ている服に驚いていた。かなりキワドイ服だなあれ。見えそうで見えないな。

「そんな所に突っ立ってないで、いらっしやいな」

キュルケが色っぽい声で言った。

ザンクロウは言われた通りに近づいた。

「座って」

ザンクロウはキュルケの隣に座った。

「で、何の用だ？」

ザンクロウはそう言ったが、視線は谷間の方を向いていた。ザンクロウも男という事だった。

「貴方は、あたしをはしたない女だと思っでしようね」

「キュルケ？」

「思われても仕方が無いの。分かる？あたしの二つ名は微熱」

「朝聞いたからな」

キュルケは谷間を強調していた。

当然ザンクロウは、それを凝視していた。

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの。だから、いきなりこんな風にお呼び立てしたりしてしまうの。わかってる。いけな
い事よ」

「だな」

キュルケはスタイル良いからな。目がいろんなところに行っちゃう。

「でもね、貴方はきつとお許し下さると思っわ」

「えっ？」

キュルケはすつと近づきその手をザンクロウの手に重ね、一本一本カインの指を確かめる様に、なぞり始める。

「恋をしているのよあたし、貴方に。恋はまったく突然ね」

「はあ…確かに」

ザンクロウは相槌を打った。

「あなたが、ギーシュを圧倒した時の姿…カッコ良かったわ。まるで伝説のイーヴァルデイの勇者みただったわ！あたしね、それを見て痺れたのよ。信じられる？痺れたのよ！情熱！ああ、情熱だわ！！」

「じよ。情熱か…」

何だろう、急に押して来てる様な？

「二つ名の微熱はつまり情熱なのよ！その日から、あたしはほんやりとマドリガルを綴ったわ…マドリガル、恋歌よ。貴方の所為なのよザンクロウ。貴方が毎晩あたしの夢に出てくるものだから、フレイルムを使って様子を探らせたり…ほんとにあたしってば、みつともない女だわ。そう思うでしょう？でも、全部あなたの所為なのよ」
「最近フレイルムが尾行してたのはそう言う事か」

何か危ない感じになって来たなキュルケ。
キュルケが段々近づてきた瞬間、

「キュルケ…待ち合わせの時間に君が来ないから来てみれば…」

窓から声がしたので見てみれば、恨めしげに部屋の中を覗く、一人のハンサムな男の姿があった。

「ペリッソン！ええと、二時間後に…」

「話が違う！」

しかしキュルケは、胸から出した杖で炎を出して、窓ごと男を吹っ飛ばした。

「まったく、無粋な梟ね」

「……………」

ザンクロウは、キュルケはギーシュ以上の行ったり来たりな女だと思っただ。

「なるほど、相手がいながら俺に言い寄ったと？」

「か、彼はただのお友達よ…？とにかく、今あたしが一番恋してるのは貴方よザンクロウ」

すると、また窓から覗いてる男がいた。今度は精悍な顔立ちの男がいた。

「キュルケ！その男は誰だ！今夜は僕と過ごすんじゃないのか
！」

「ステイツクス！ええと、四時間後に…」

「そいつは誰だ！キユルケ！」

キユルケはまた杖を出し、男は火にあぶられ、地面に落ちていった。

「またか…」

「か、彼は友達というよりはただの知り合いね…！とにかくっ、時間あまり無駄にしたくないの！夜が長いなんて誰が言ったのかしら、瞬きする間に、太陽はやってくるじゃないの！」

二股どころか三股しようとしたのかキユルケは…。

なるほど、ルイズがキユルケを嫌う訳だ。かなり不誠実で惚れ易く尻の軽い女だなうん。

ザンクロウは立ち上がり、部屋を出ようとした。

「帰るわ俺…」

「待って…！分かってる、分かってるの。いきなりこんな形で告白なんて、はしたない事よ。時々、自分で自分の恋ツ気の多さが怖いと思う事もあるわ。でも仕方ないじゃない。恋は突然だし、すぐにあたしの身体を炎の様に燃やしてしまうんだもの」

何とかザンクロウを引き留めようとするキユルケだが、間の悪い事にまた窓から多くの声がした。

「…キユルケ！そいつは誰なんだ！恋人はいないって言ってたじゃないか…！」

「マニカン！エイジャックス！ギムリ！」

今まで出てきた男が全員違う事に、ザンクロウは呆れを通り越して感心さえ感じていた。

三股どころか、俺を入れて六股しようとしたのかキユルケは…。

「ええと、六時間後に…」

「朝だよ！」

「フレイムー！」

キュルケがうんざりした声で、フレイムに命令する。それを受け、フレイムはのそりと起き上がり、三人が押し合っている窓だった穴に向かって、炎を吐いた。

三人は仲良く地面に落下していった。

「まったく、何なのかしらねあの連中？とにかく、愛してる！」

キュルケが魔性の女だって事はよく分かった。体は良いのにな。

「悪いがさよならだ」

ザンクロウはドアノブを掴もうとした瞬間、

バンッ

突如扉が開いた。

「キュルケッ！」

「フゲッ!？」

内開きだった為、ザンクロウは急に開いた扉にぶつかかった。開いたドアの向こうにいたのは、眉を吊り上げたルイズだった。

「取り込み中よ。ヴァリエール」

「ツエルプストー！誰の使い魔に手を出してんのよ!？」

ルイズは見るからに怒り心頭である。が、対するキュルケは余裕だ。ザンクロウは扉にぶつけた顔を押さえて蹲ってた。

「仕方ないじゃない、好きになっちゃったんだもん。恋と炎はツエルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命よ。恋の業火で焼かれるなら、あたしの家系の本望よ。あなたが一番ご存知でしょう？」

キュルケが両手をすくめて見せると、ルイズは手を握りしめ、ワナワナと震えだす。

「行くわよ。ザンクロウ」

「分かってる…」

じろりと睨んでくるルイズに顔を押しえながら出て行くこととするザンクロウだが、元々出ていくつもりだったので反対する理由は無かった。

しかし、そんなザンクロウを無視してキュルケがルイズに反論する。

「ねえルイズ。彼は確かにあなたの使い魔かもしれないけど、意思だってあるのよ。そこは尊重してあげないと」

その後も、キュルケと付き合ったら十人以上の貴族に闇討ちされるだの、ザンクロウの実力なら大丈夫だの、不意討されたらだの、自分が守るから大丈夫だのと、不毛な言葉の応酬が続いた。ザンクロウはその光景に呆れて、部屋に戻ろうとするが、

「あら、お戻りになるの？」

キュルケがウルウル目で言ってきたが、無視して部屋に戻った。

そして、「ふん、このぐらいじゃ諦めないわよ！」って声が聞こえたが、聞かなかった事にした。
部屋に戻ると、ルイズは憤怒していた。

「ザンクロウ…アンタまるでサカリのついた犬じゃないのー！」
「うわっ!？」

「そこに這いつくばりなさい!私間違ってたわ。アンタを一応特別扱いしてたからこうゆう事になるのね」
「る、ルイズ?」

ルイズは机の中から乗馬用の鞭を取り出した。

「ツエルプストーの女に尻尾を振るうなんてえー、犬うーうーうー
!!!」

「どわあっ!?!待てルイズ!?!落ち着け!?!」

ザンクロウは咄嗟に時のアークで、鞭を朽ちらせた。

「あっ!?!」

「物の寿命は俺が握ってるぞルイズ」

「だったら…!」

「ルイズ?」

「ブン殴る!」

「どわっ!?!」

しかし、

ゴンッ

「痛^{いった}あっ!?!」

ザンクロウは思わずノー口さんに自分の毛を付けたままだった為、材質を鉄にして自身の体を鉄に変えた。その為、殴りかかったルイズは手を押さえて痛がってた。

「わ、悪い…大丈夫か？」

さすがに罪悪感を持ったザンクロウ。

「痛い…アンタの体頑丈ね…」

「悪かったって」

痛みの所為か、怒りが静まったルイズ。

ザンクロウは事情を話した。前半は色香に惑わされたが、後半は目が覚めて帰ろうとした事も話した。

「なるほどね、アンタが誰と付き合いおうとアンタの勝手だけど、キルケはダメよ！」

「朝もそうだったけど、何でキルケを目の敵にするんだ？」

「あんたは知らないだろうけど、この際だから教えといてあげる！」

気迫たつぷりなルイズに怯むザンクロウ。

「まず、キルケはトリステインの人間じゃないの、隣国ゲルマニアの人間よ！それだけでも許せないわ！私はゲルマニア人が嫌いな
の！」

「はあ…」

「私の実家があるヴァリエールの領土はね、ゲルマニアとの国境沿いにあるの。だから戦争になるといつつも先頭切ってゲルマニアと戦ってきたの！そして、国境の向こうの地名はツェルプストー！キ

ユルケの生まれた土地よ！それに戦争の度に殺し合ってるのよ！お互い殺された一族の数はもう数えきれないわ！」

「そ、そうか…」

「あのキユルケの家は…フォン・ツエルプストーの家は…ヴァリエールの領地を治める貴族にとって不倶戴天の敵なのよ！実家の領地は国境挟んで隣同士！寮では隣同士！許せない！」

「なるほど、先祖代々から犬猿の仲だったって訳か」

「それ以外にも…」

「ん？」

あれ？まだ何かあるのか？

「あの色ボケの家系の所為で…私の先祖はどれだけの苦汁を舐め続けて来た事か！」

「何が…あつたんだ？」

「キユルケのひいひいひいお祖父さんのツエルプストーは、私ひいひいひいお祖父さんの恋人を奪ったのよ！今から二百年前に！」

「……………は？」

「それからあのツエルプストーの一族は、散々ヴァリエールの名を辱めたわ！ひいひいお祖父さんはキユルケのひいひいお祖父さんに婚約者を奪われたの！」

「そ、そうなのか…」

「ひいお祖父さんのサフラン・ド・ヴァリエールなんかね！奥さんを取られたのよ！あの女のひいお祖父さんのマクシミリ・フォン・ツエルプストーに…いや、弟のデューディッッセ男爵だったかしら

…」

「……………」

どっちだよ！っかどうでもいい。すっごくどうでもいいって、んな事。前半は納得はいくが、後半は単なる妬みじゃねーか」

「ザンクロウ！誰が妬んでるって！」

「うをつ！？何故俺の考えてる事が分かった！？」

「途中から声に出てたわよ！」

しまった！？俺とした事が！？

「とにかく、アンタもあの女に惑わされちゃダメなんだからね！」

「わ、分かった」

するとルイズは何か考え始めていた。

「アンタに剣を買ってあげるわ」

「いきなりなんだよ？」

「私の使い魔ならある程度は立派に見える様にする為よ」

「別に買わなくてもすぐに出せるが？」

「う……」

そう言っつて剣を出すザンクロウ。

「な、何も知らない人から見たら、先住魔法だと誤解されるでしょう！その時に出すんじゃないやなく、最初っからあつた方がまだ自然ですよ！」

「まあ、確かに一理あるな。でも俺、剣なんて使った事無えから役には立たないと思うけどな」

「良いから！とにかく明日行くわよ！」

「はいはい。てか、授業はどうすんだよ？」

「明日は虚無の曜日だから学院は休みよ」

「なるほど」

要は日曜日みたいなものか？

ザンク로우達は明日に備えて眠った。
翌日、外に出た二人。

「ルイズ、どうやって街に行く気だ？」

「馬だよ」

「馬なんて乗った事無えぞ」

「だったら私にしがみ付いてて」

ルイズが馬を用意しようとしたが、ザンク로우はある事を思い付いた。

「なあルイズ、どうせだったらこれ使うか？」

ザンク로우は具現のアークである物を造り出した。

「何コレ？」

「バイクだ」

サイドバイクを出したザンク로우。
ちなみにザンク로우は生前、運転免許を持っていたので、バイクも運転できるのだった。

「ばいく？」

「言ってみれば、馬よりも速い乗り物だ」

「そうなの!？」

「乗ってみるか？」

「じゃあお願いするわ」

「良しきた」

ザンク로우は隣の席にルイズを乗せて、シートベルトを付けさせた。

「じゃあ、行くぞ！」

ザンクロウはバイクを動かし、目的地へと向かった。

キュルケサイド

昼前、キュルケが目を覚ましていた。

「ふあ…そうだわ、色んな連中が顔を出すから、吹っ飛ばしたんだっけ？」

昨日の騒ぎで、窓は吹き飛んだままだが、そんなことは彼女にとって些細なことであった。今、彼女が化粧をしながら考えるのは「どうやってザンクロウを口説こうか」ということである。

化粧中、彼女は非常に生き活きとした笑みを浮かべていた。

化粧を終え、自室を出て隣の部屋、つまりルイズの部屋のドアをノックする。

反応を待つ間、キュルケは顎に手を置いて、妖艶な笑みを浮かべる。ザンクロウが出てきたら、抱きついてキスをする。ルイズが出てきたらどうしようかしら、と少しだけ考える。

その後も、あれこれとザンクロウを誘惑する考えを巡らしていたが、いつまで経っても中から返事が来ない。

キュルケは、躊躇いなくドアに「アンロック」の魔法をかけた。軽く音がして鍵が開く。本来学院内でアンロックの魔法は使用を固く禁じられているのだが、キュルケは「恋の情熱はすべてのルールに優先する」というツエルプストー家の家訓に則り、あっさり無視して行った。

しかし、そうしてドアを開けると、室内はもぬけの殻だった。

「相変わらず、色気のない部屋ね……」

部屋を見渡してそう呟いていた時、外から異様な音が聞こえた。

「何、この音？」

窓から外を見ると、門から鉄の何かに乗って出て行く姿が見えた。しかもよく目を凝らすと、ザンクノウとルイズの姿だった。

「なによー、出かけるの？」

キュルケはつまらなそうにそう呟くが、ふと何かを閃いた様子でルイズの部屋を飛び出した。

所変わってタバサの部屋。

キュルケはタバサのシルフィードを頼りにきた。

部屋を思いつき叩く様にロックした後、鍵をアンロックで開けて入るキュルケ。

「……………」

キュルケは思いつき何かを喋ろうとしたが、まるで音そのものが無くなったかのように「シーン」と静まりかえっていた。

そう、タバサが「サイレント」を使って無音状態にしたからだ。

躍起になったキュルケは、タバサが読んでた本を取り上げた。

タバサは仕方なしにサイレントを解いた。

「タバサ、今から出かけるわよ！早く支度をしてちょうだい！」

「虚無の曜日」

取り上げた本を取り返そうとするタバサだったが、キュルケとは身長差があり過ぎる為、なかなか取れない。

「分かってる。貴女にとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしは痛いほど良く知ってるわよ。でも今はね、そんな事言ってもらえないの！恋なのよ恋！解るでしょ？」

相変わらずキュルケは突拍子の無い事を言っていた。
タバサは首を横に振った。

「そっか。貴女はちゃんと説明しないと動かないのよね。あたしね、恋をしたの！でもその人が今日、あのにっくいヴァリエールと出かけたの！でも見た事の無い変な鉄の何かに乗ってっちゃったから、貴女の使い魔じゃないと追いつかないの、ねえ助けて！」

「鉄の何か？」

タバサは何か考えた後立ち上がり、窓の方に歩いた。

「分かってくれた？ありがとう！」

窓を開き、口笛を吹くと、シルフィードがやって来た。
そして窓から飛び降りて乗り込んだ。

「いつ見ても貴女のシルフィードは惚れ惚れするわね」

「どっち？」

「えっと…慌ててたから…」

そそっかしいキュルケだった。

「鉄の何か、食べちゃ駄目」

そしてキュルケ達は、ルイズとザンクロウを追いかけた。

ザンクロウサイド

バイクに乗ってきて一時間半くらいでこの国の首都、トリスタニアトリステインに辿り着いた。

「あんな速く移動する乗り物があつたなんて、アンタの所はこれが一般的だったの？」

「まあな、つっても乗るには多少の規制はあるけど、神の俺にはそんなもの関係無いけどな」

「よく分からないわ…」

取り合えずバイクを消して、武器屋を目指して街に入る二人。

「狭えなこの道」

「狭いって、これでも大通りなんだけど」

「これで!?!」

こんな狭い道が大通りって、俺らの世界の方がよっぽど広いわな。

「ブルドンネ街、トリステインで一番大きな通りよ。この先にトリステインの宮殿があるわ」

「あの大きな建物か？」

「そうよ。女王陛下が治めているのよ」

女王ね…俺には縁の無い言葉だからピンと来ないな。

「ルイズ、女王って何だ？」
「女王を知らないのアンタ!？」
「知らねえから聞いてんだろ？」
「アンタって…まあいいわ。国で一番偉い存在の事よ」
「ふ〜ん」

総理みたいなものか。

ザンクロウが考え込んでたのを見て、ルイズは尋ねてきた。

「何考え込んでんのよ？」
「ん? いや、何で人間同士で格差を決めるんだろうなって思っただけさ。俺よりも格下なのによ」
「そういえばアンタは神様だっけ? アンタから見ればそう見えるのかしら?」
「そう思ったただけだ。んで、武器屋はどこだ?」
「こつちよ」

ルイズはそう言って路地裏の方に進んだ。

何だここは! ? ゴミやら汚物がたくさんあるじゃねえか!

「きつたねえな…」
「あんまりこつちに来たくないけど、武器屋はここを通らないと行けないのよ…」
「つたく、少しは綺麗にしゃがれ!」

ザンクロウは時のアークで、ゴミは時を進めて塵にしたり、悪臭は時を戻させて匂いが付く前の状態にしたあり、道は時を戻して汚れる前の状態にさせた。

「これで少しはマシになるだろ」

「あんだけ汚かった道が…こんな綺麗に!？」

「んで、どこ行きゃいいんだ？」

「えっ!？ああ、そうね!？こっちよ!」

綺麗になった路地裏を進んで行く二人。

「えっと、確かピエモンの秘薬屋の近くだから、この辺何だけど…」

ルイズはキョロキョロ見回りながら進んで行くと、

「あ、あつた!」

どうやら目的の店に辿り着いた様だ。

なるほど、よく見たら剣の看板があるな。

ルイズとザンクロウは、店の中へと入って行った。

へへ、色んな武器があるな。

すると、店主がルイズとザンクロウを胡散臭げに見つめたら、急に声を上げた。

「旦那、貴族の旦那!うちは真つ当な商売してまさあ。お上に目をつけられるような事なんか、これっぽっちもありませんや」

「客よ」

「こりやおつたまげた。貴族が剣を!おつたまげた」

「どうして?」

「いえ、若奥様。坊主は聖具を振る、兵隊は剣を振る、貴族は杖を振る、そして陛下はバルコニーからお手をお振りになる、と相場は決まっておりますんで」

「使うのは私じゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今は貴族の従者も剣を振るようで」

店主は商売口上を並べて愛想よく言った。そして、辺りを見回す。

「剣をお使いになるのは、この方で？」

「そうよ」

ザンクロウは既に店の中をキョロキョロ見ていた。

「私は剣の事何か解らないから、適当に選んでちょうだい」

「あいよ（こりや鴨が葱背負ってやって来たわい。せいぜい高く売
りつけるとしよう）」

店主は腹黒い事を考えながら店の奥へと進んだ。
しばらくすると、店主はレイピアを持ってきた。

「そっぴや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たすのが
流行っておりますね。その際にお選びになるのが、このようなレ
イピアでさあ」

何か…弱そうな剣だな。

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのが流行ってる？」

ルイズが尋ね、主人はもつともらしく頷いた。

「へえ、なんでも、最近このトリスティンの城下町を、盗賊が荒ら
しております…」

「盗賊？」

「そうです。なんでも、「土くれのフーケ」とかいうメイジの盗賊
が、貴族のお宝を散々盗みまくってるって噂で。貴族の方々は恐れ
て、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

ルイズは盗賊には興味がなかったので、じろじろと剣を眺めた。

「もつと大きくて太いのがいいわ」

「お言葉ですが、剣と人には相性つてもんがございます。男と女のように。見たところ、若奥様の使い魔とやらには、この程度が無難な様で…」

「大きくて太いのがいいと言ったのよ！」

「へ、へい！（ちっ、素人が…）」

店主は再び奥へと向かった。

「これなんていかがですか？」

そして持ってきたのは、立派過ぎると言っても過言じゃない程の立派な大剣だった。

ザンクロウはそれを手に取ってみた。

うわゝ…見栄っ張りな剣が来たなこれ。

「店一番の業物でさ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げて欲しいものですな。と言っても、こいつを腰から下げるのはよほどの大男でないと無理でさあ。やっこさんなら、背中に背負わんといかんですな」

「良い剣ねこれ」

ルイズはこれが気に入ったみたいだ。

「コイツを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿でさ。魔法がかかっているから鉄だつて一刀両断でさ。ごらんなさい、ここにその名が刻まれているでしょう？」

「おいくら？」

「エキユー金貨で二千、新金貨なら三千でさ」

「立派な家と森付きの家が買えるじゃないの!？」

えっ?こんな悪趣味なのにそんな価値があんの?

「真の名剣は、城に匹敵しますぜ。屋敷で済んだら安いモンでさ」

「新金貨で百しかないわ」

「まともな大剣ならどんなに安くても、相場は二百ですぜ」

ルイズは顔を赤くしていた。

するとルイズはザンクロウの近くに寄った。

「ザンクロウ、アンタの力で金貨増やしてよ」

「断る。そんな理由で金を出せって言うんならシバクぞ」

「何よケチ!」

俺を何だと思ってやがるんだコイツ。

でも俺は、

「それに、俺はこんなの使いたくねえ!」

「えっ!？」

「こんなメツキで貼った様な物、要らねえよ!」

「め、メツキとはとんでもない!？この剣はかの…」

「誰が造ったかなんてどうでもいい、それに刀身の色が剥げてるんじゃない騙す意味無えだろ？」

「「ええっ!？」」

ルイズと店主は剣を見た。

すると、刀身の一部のほんの少しだが、剥げてる部分があり、中か

ら鉄が見えてた。

「何コレ！？塗装してるじゃない！？」

「そ、そんな筈は！？」

「つまりテメーはパチモンを売ろうとしてたんじゃねえか！」

「これって立派な詐欺じゃないの！」

「ひ、ひいいっ！？」

実はザンクロウの具現のアークで、塗装が剥がれた様に見せかけただけだった。

正直言つて、あの剣は使いたくなかったからな。あんな悪趣味に金ぴかにしたのなんて、こつちから願い下げだったしな。

その時、どこからか笑い声が聞こえてきた。

「はははははっ！良い気味だな！」

「な、何よこの声！？」

「どっから聞こえんだ？」

周りを見渡しても、店ん中は俺とルイズと店主しかいねえし？

「おめえの目は節穴か？」

「何だと！」

「ここだここ」

「ん？」

ザンクロウは、樽（武器入れ）の中にあつた一本の錆びた剣を見た。

「よお」

「おいおいマジか！？」

その錆びた剣が喋っていた。
さすがファンタジーな異世界、喋る剣があるんだな。

「やいデル公！お客様に失礼な事言うんじゃないやねえ！」

「それって、意思を持つ剣、インテリジェンスソード？」

「そうでさ若奥様。一体どの魔術師が始めたんでしょかねえ、剣を喋らせるなんて。とにかくやたらと口は悪いわ、客にケンカは売るわで閉口してまして…やいデル公！これ以上失礼があったら、貴族様に頼んで溶かしちまうからな！」

「おもしれえ！やってみろ！どうせこの世にやもう飽き飽きしてたところさ！溶かしてくれるんなら上等だ！」

「やってやらあ！」

漫才してんのかこいつら？でもあの剣、結構気が合いそうだな。

「待てよ、喋る剣ぐらい良いじゃねえか」

ザンクロウは剣をまじまじと見た。

「俺あザンクロウだ。んでお前はデルコーか？」

「デルフリンガーだ！」

「名前だけは一人前でさ」

「ふん」

ザンクロウは何気無くデルフリンガーを手に持ってみた。
そしたら、

「！？まさかお前さん！？」

「ん、何だよ？」

何か急に慌てだしたな？

「た、頼む、命だけは助けてくれ！？店主！早くこいつから俺っちを引き離してくれ！」

「な、何だよ急に！？」

「お前さん、「使い手」だが、やばい方の使い手だ！？とにかく俺から離れてくれ！」

使い手？気になるな。つか、何か面白いなこいつ。

「ルイズ、俺これにするわ」

「ええっ！？」

「なにいいー！っ！？」

「へい、まいど」

嫌がるデルフをスルーして買おうとするザンクロウ。

「もっと綺麗で喋らない剣にしなさいよ」

「いいじゃねえかよ、こいつ面白いし」

「俺っちは面白くもねえ！早く離してくれ！」

「しょうがないわね、あれおいくら？」

「あれなら百で結構でさ」

「安いじゃない？」

「こつちにしてみれば、厄介払いみたいなもんでさ」

「そんな事言わないで助けてくれ！」

さっきつから煩いな。

「待てデルフ、俺はお前が気にいったから買おうとしてんだ。何で嫌がるんだお前？」

「お前さん、自分の実力も知らねえのか？」

「とにかくだ、俺はお前に何もしねえから、俺の剣になれ！」

「…分かった。絶対だかな！」

ようやく大人しくなったデルフリンガー。

ルイズ達の方を見ると、いつの間にか会計が終わっていたので、デルフを店主に渡した。

そして店主は、デルフを鞘に入れた。

「やっと静かになったわね」

「どうしても煩かったら、こうやって鞘に入れれば大人しくなりませあ」

店主からデルフを受け取ると、鞘から少し出した。

「よろしくなデルフ」

「…あいよ」

どこか観念したデルフが軽く挨拶した。

キュルケサイド

武器屋を出たルイズとザンクロウは、トリスタニアでの用件は済んだので魔法学院に帰る事にした。

デルフリンガーという剣を持って来た道に戻る二人。そんな彼らを路地の影から見詰める少女が二人いた。キュルケとタバサだった。

あの後、ザンクロウが造ったバイクを見つけるのに時間がかかったが、何とか街の方だと分かり、二人とシルフィードはここまで尾行してきたのだった。

キュルケは二人の様子を見て、唇をギリギリと噛み締めていた。

「ゼロのルイズだったら…剣なんか買って気を引こうとしちゃって…あたしが狙ってるって解ったら、早速プレゼント攻撃！？なんなのよー！」

キュルケは苛立ちを隠そうとせずに地団駄踏んでいた。そして武器屋に入っていくキュルケ。

「おや！今日はどうかしてる！また貴族だ！」

「ねえご主人」

キュルケは自慢の赤い髪を掻き上げ、艶っぽく笑みを浮かべた。その色気と良い匂いに、店主は少し気圧された。

「今の貴族が何を買ってたか、ご存知？」

「へ、へえ。剣でさ」

「なるほど、やっぱり剣ね…どんな剣を買ってたの？」

「へえ、ボロボロの剣を一振り」

「ボロボロ？どうして？」

「お連れさんがえらく気に入ってしまいやしたので」

ダーリンが何故ボロボロの剣を買おうとしたのかしら？

「何でも最初は持ち合わせが足りなかった様でして、へえ」

なるほど、ルイズに気を使わせたのね。ああ見えて優しいのねダーリン。

店主から理由を聞いたキュルケは、セレブ調に「おほほほ！」と大笑いした。

「貧乏ねヴァリエール！公爵家が泣くわよ！」

「若奥様も、剣をお買い求めで？」

「ええ。見繕って下さいな」

すると店主は、先程ルイズとザンクロウに見せた金ぴかの大剣（剥げてる部分はいつの間にか無くなってた）だった。

「あら、ご立派ね」

「若奥様、さすがお目が高くていらっしゃる。しかし、お値段の加減が釣り合いませんで。へえ」

「ホント？」

「左様で。何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿で。魔法が掛かっているから鉄だつて一刀両断でさ。ご覧なさい、ここにその銘が刻まれているでしょう？」

店主は、先程と同じ口上を述べた。

「おいくら？」

そう訊ねたキュルケを、店主はじつと見た。どれくらいを出すか値踏みしたところ、羽振りは良いと判断した。

「へえ、エキュー金貨で二千、新金貨で三千でさ」

「ちよつと高くない？」

キュルケとしても即断できない金額である。

「へえ、名剣は釣り合う黄金を要求するもんでさ」

もつともらしい言い方だ。

キュルケは何やら思案した後、おもむろに店主にその豊満な身体を寄せた。

「ご主人……ちょっとお値段が張りすぎじゃございませんこと？」

艶めいた声と仕草、そして香り。顎を色っぽく撫でられて、店主は息を呑んだ。その辺の色街でも感じた事の無い刺激だった。

「へ、へえ…名剣は…」

店主は先程と同じ事を言おうとして失敗した。

キュルケがカウンターに腰掛け、左足を上げた為、見事な脚線美に目を奪われる。

それからキュルケの独壇場だった。

脚を動かすと太腿の根っこ…スカートの中が見えそうになり、店主は価格を新金貨で二千まで下げた。

「暑いわね……」

さらに今度はシャツのボタンを一つ外して潤んだ目で見詰めた。店主は価格をまた新金貨で千五百まで下げた。

「シャツ、脱いでしまおうかしら……。よろしくて？ご主人」

もう一つボタンを外した。店主は価格をさらに新金貨で千二百まで下げた。

また一つボタンを外した。胸の谷間がバンと見えて、店主は価格をこれでもかと新金貨で千まで下げた。

キュルケは続いてスカートの裾を少し持ち上げた。ぐん、と店主の

首が動き、目が見開かれる。

その途端、ゆっくり上がっていたスカートの動きが途中で止まった。店主は絶望したかのような表情を浮かべた。

「千よ」

そう言っつて、またスカートの裾が少し上がり、また止まった。店主は泣きそうな顔でキュルケを見る。彼女は「ふふん」と笑みを浮かべ、少しスカートの裾を戻した。

「あ、ああ……」

「千」

「へえ！新金貨千で結構でさ！」

それを聞いて即座にカウンターから降りたキュルケは、取り出した小切手帳から一枚切った。そしてそれを店主に渡す。

「買ったわ」

そして、剣を掴むとさっさと店を出て行った。良い買い物したわ。

キュルケは剣を抱えて、外で待ってたタバサを連れて学院へと帰った。

ザンク로우サイド

何故こうなった？

ザンク로우はそう思っていた。

「どういう意味？ツエルプストー」

「だから、ザンクロウに相応しい剣を手に入れたから、そっちを使いなさいって言ってるのよ」

キュルケが持つてるのは、俺がいらないと決めた金ぴかの剣だった。ザンクロウは隣にいるタバサに問いかけた。

「なあタバサ、この状況の説明、よろしく」

「キュルケのプレゼント作戦」

「なるほど」

なんとまあ解りやすいな。キュルケは一度狙った男はしつこく狙うつもりの様だ。蛇みてえ。

「それに、その剣は塗装された紛い物よ！ザンクロウが調べたんだから間違いないわよ！」

「ええっ！？ホントなのザンクロウ！？」

「ああ、見た感じ解らない様に塗装し直したみたいだけどな」

「そんな〜……」

「ふん、所詮見た目で判断して中身を見ないゲルマニアの女には相応しいわね！」

「何ですって！」

ルイズ、それはお前にも言える事だぞ。

「まったく、トリステインの女ときたら、貴女みたいに嫉妬深くて、気が短くって、ヒステリーで、プライドばかり高くって、どうしようもないんだから」

「誰が嫉妬深くて、気が短くて、ヒステリーで、プライドばかり高

いのよ!？」

自分を引き合いに出され、しかも手酷く酷評されるのを聞いて、ルイズが眉を吊り上げてキュルケに怒鳴りつける。そんな様子に、キュルケは余裕の態度で見返す。

「なによ、ホントの事じゃないの」

それにはザンクロウも内心同意していた。何せ、今の癩癩がキュルケの言った事を全て肯定してしまっていたのだから。

ルイズもそれに気が付いたようで、怒りか羞恥か、顔を赤くして震え出す。

「ふ、ふんっ、あんななかただの色ボケじゃない!なあに?ゲルマニアで男を漁り過ぎて相手にされなくなったから、トリスティンまで留学して来たんでしょ?」

ルイズの挑発に、キュルケの顔色が変わる。

「言ってくれるわねヴァリエール…」

先程までの余裕の表情とは違い、その顔には確かな怒りが宿っている。キュルケの余裕が崩れた事に、再びルイズが勝ち誇ったように笑う。

「なによ、ホントの事でしょう?」

間に沈黙が流れ、二人は同時に各々の杖を取り出す。だが、それまで、傍観すらしていなかったタバサが、素早く自分の杖を振った。つむじ風がルイズとキュルケの杖を吹き飛ばす。

「夜中」

タバサは短くそう言った。この時間にドタバタ騒ぐのは近所迷惑だ、と言いたいらしい。

自分の杖を飛ばされて、タバサに視線を向けたルイズが呟く。

「何この子？さっきからいるけど」

「あたしの友達よ」

ルイズの呟きにキュルケが答えた。ルイズは再び視線をキュルケに向けて睨みつけた。

「なんで、あなたの友達がここにいるのよ」

「別にいいじゃない」

答えつつ、キュルケもルイズを睨み返す。

そうしてしばらく睨み合っていたが、突然キュルケが不敵な笑みを浮かべて言った。

「ねえ、そろそろ決着を付けませんか？」

「いいわ、望むところよ！」

キュルケもルイズも、顔は笑っているが目は笑っていない。お互いに敵意を剥き出しにしていた。

そして、二人は同時に怒鳴った。

「決闘よ！」

ザンクローはこの状況について来れず、ため息をついた。

フリーケサイド

学院本塔の壁を調べていた人物がいた。

そう、トリステインで噂になっているメイジの盗賊、土くれのフリーケだった。

フリーケが学院本塔の壁を調べていたのは、学院の宝物庫にあるマジックアイテムを強奪する事だった。

だが、この壁はスクウェアアークラスの固定化が掛けられており、ちょっとやそつとじゃ壊せないでいた。

未だ良い案が浮かばずに途方に暮れていた。

何度考えても、自分がこの硬い外壁を壊すイメージが湧かない。

「まいったねえ…これじゃ私のゴーレムでも壊せそうにないね…」

自前の能力だけではこの問題は解けないと諦めかけていたところ、誰かが数人、ここへ近付いてくるのが見えた。

「こんな時間に誰だい？ やつとここまで来たつてのに…」

煩わしそうに嘆息したフリーケは、魔法で浮かせていた身体をすぐ地上に降ろし、素早く身を隠す。

「かといって、破壊の杖を諦める訳にゃあいかないね…」

近くにあった木々の植え込みに入り、そこから様子を窺うように目を光らせた。

ザンク로우サイド

だから、何故こうなった？

今ザンク로우は、学院本塔の屋上からロープで吊るされていた。

「いいことヴァリエール、あのロープを切って、ザンク로우を先に地面に落としたほうが勝ちよ。あたしが勝ったらあの剣をアンタの部屋に飾る事、いいわね？」

「分かったわ！」

明らかに不利な条件だぞルイズ。

何故こうなったかと言うと、あの後タバサが、

「ザンク로우を吊らせて、それを落とした方が勝ち」

と言った事により、対処する暇も与えずに吊るされたという。

そして、ルイズ達の近くにある賞品の剣は、ルイズの部屋に飾るか否かで話が決まったという。

「おいコラタバサ！何でこんな事を思い付いたんだ！」

ザンク로우は、近くでシルフィードに乗っていたタバサに文句を言った。

「これが、一番平和的」

「俺の平和はどうなるんだ！」

タバサはもう、我関せずといった具合に本を読み始めた。

「聞けやコラ！（くそっ！時のアークが使えりゃな！）」

ザンクロウは時のアークで縄を朽ちらせる事は出来るが、キュルケがいる為に使いたくても使えないでいた。結局、吊るされた状態でジタバタする事しか出来なかった。一方、下にいるルイズとキュルケは、

「使う魔法は自由。けれど、あたしは後攻。そのくらいはハンデよ」
「いいわ」
「じゃあ、どうぞ」

キュルケが一步退いて場所を譲る。そしてルイズが一步前へ出て杖を構えた。
そしてルイズは魔法を放とうとした。

「ファイアボール！」

数ある魔法の中で一番命中率のあるファイアボール使うルイズだが、杖の先からは何も出なかった。
その時、

ドカアアーン

「どわあっ!?!」

ザンクロウのすぐ後ろの本塔に爆発が起きた。
爆発によって、本塔の壁にヒビが入った。

「ちょっとザンクロウ!今ので落ちなさいよ!」
「無茶言っな!つか殺す気か!」
「大丈夫でしょ?アンタ頑丈なんだから」

「いくら俺でも防ぎようが無いわコラー！」

「あつはつは！ゼロ！ゼロのルイズ！ロープじゃなくて壁を破壊してどうするの！器用ね！」

キュルケはルイズの失敗に腹を押さえて大笑いする。ルイズは悔しそうに膝をついた。

「さて、あたしの番ね…」

キュルケは狩人の目で標的のロープを見据える。余裕の笑みを浮かべつつ、短くルーンを呟く。

そして、手慣れた杖を突き出すと、杖の先から人の顔程度の大きさの火球が飛び、まっすぐにロープに向かって行った。

狙いの通り、キュルケのファイヤーボールはロープに当たり、瞬時に焼き切った。

ロープを焼け切った為、ザンクロウは真つ逆さまに落ちて行った。

そうなる前にタバサがレビテーションを行い、ゆっくりとザンクロウを降ろした。

「あたしの勝ちね！ヴァリエール！」

キュルケが勝ちを宣言し、ルイズはしょんぼりして座り込み、草むしりを始めた。

その時、突然地面が盛り上がった。

巨大な土のゴーレムだった。

「きゃあああああああ！」

キュルケの悲鳴は悲鳴を上げて逃げ出した。

「でかつ!？」

ザンクロウも逃げようとしたが、ロープでグルグル巻きにされて身動きがとれず、逃げられないでいた。

我に帰ったルイズは、ザンクロウに駆け寄った。

「早く何とかしなさいよ!てか何で縛られてんのよ!」

「お前らが縛ったんだろ!早くこのロープ何とかしろ!」

「ええ!て、アンタそれ、ロープを朽ちらせられないの?」

「あつ!？」

そうだった!キュルケは真っ先に逃げたから、もう出し惜しみなくして良いんだった!

すぐさま時のアークでロープを朽ちらせた。

自由の身となったザンクロウは、ルイズを連れて逃げるが、ゴーレムの足が目の前まで来ていた。

「!のっ!」

ザンクロウは時のアークで、ゴーレムの足の部分の時を進ませて崩した。

結果、ザンクロウとルイズのいた部分は踏まれずに済んだ。

いや、踏まれる前にシルフィードが滑り込み、二人を両足で掴んで間一髪すり抜けた。

「何だったんだ、あのでかいのは!」

「:あんな大きい土ゴーレムを操れるなんて、トライアングルクラスのメイジに違いないわ」

ゴーレムはそのまま学院の本塔へ殴りかかり、けたたましい音を立

てて大きな穴を開けられた。

そして、一人の黒いローブを纏った人物が、何かを抱えて逃げて行った。

本塔の宝物庫に、破壊の杖が入っていた宝箱から見える位置の壁に、

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

と刻まれていた。

その後、フーケを搜索していたが、巨大ゴーレムと思わしき土くれの小山が発見されたが、肝心のフーケの姿は消え失せていた。

キュルケの誘惑とデルフ購入と泥棒騒ぎ（後書き）

リーヴスラシルのルーンで嫌がるデルフでした。

フーケはフェアリーテイル風で言うと、土の造形魔導士ですね。

今回はフーケとの対決。そして意外な結末に！？

ザンクロウの真価発揮（前書き）

いよいよザンクロウのゴッドスレイヤーの部分で暴れます。

ザンクロウの真価発揮

ザンクロウサイド

翌日、フーケの目撃者としてルイズ、キュルケ、タバサの三人は宝物庫に呼び出された。

俺は使い魔で平民扱いだから数に入って無いとよ。
しかも入ってみると、ここの教師と思わしき連中が下らない擦り付け合いをしていた。

「ふむ、君たちか」

オスマンは興味深そうにザンクロウを見つめた。

「詳しく説明したまえ」

ルイズが進み出て、説明を始める。

「あの、大きなゴーレムがこの壁を壊したんです。肩に乗ってた黒いローブを着たメイジが宝物庫に開いた穴から中に入って、何かを…その破壊の杖だと思えますけど…盗み出した後、またゴーレムの肩に乗りました。ゴーレムは城壁を越えて歩き出して…最後には崩れて土になってしまいました」

「それで？」

「後には、土しかありませんでした。肩に乗っていた黒いローブを着たメイジは、影も形も無くなっていました」

「ふむ…」

オスマンは髭を撫でた。

「後を追おうにも、手がかり無しというわけか…」

それから、オスマンは、気付いたようにコルベールに尋ねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「それがその…朝から姿が見えませんが」

「この非常時に、何処に行ったのじゃ？」

「どこなんでしょう？」

そんな風に噂していると、ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル！何処に行っていたんですか！？大変ですぞ！事件ですぞ！」

コルベールが興奮してまくし立てる。

ロングビルは落ち着いた態度でオスマンに言った。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの
「調査？」

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこの通り。すぐに壁にフーケのサインを見つけたので、これが国中を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をいたしました」

「仕事が早い。ミス・ロングビル」

大怪盗？昨日店のオヤジは盗賊って言ってなかったか？

そして、コルベールが慌てた調子で促した。

「で、結果は？」

「はい。フーケの居所が分かりました」
「な、なんですと!?!」

コルベールは素っ頓狂な声を上げる。

「誰に聞いたんじゃね?ミス・ロングビル」

「はい。近在の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に入っていた黒ずくめのローブの男を見たそうです。おそらく、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

「黒ずくめのローブ?それはフーケです!間違いありません!」

ルイズが叫ぶ。

オスマンは目を鋭くして、ロングビルに尋ねた。

「そこは、近いのかね?」

「はい。徒歩で半日、馬で4時間といったところでしょうか」

「すぐに王室に報告しましょう!王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては!」

コルベールが叫んだ。

だが、オスマンは首を振ると怒鳴った。

「馬鹿者!!王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまわ!その上、身にかかる火の粉を己で振り払えぬようで、何が貴族じゃ!魔法学院の宝が盗まれた!これは、魔法学院の問題じゃ!当然我らで解決する!」

ロングビルは、まるでこの答えを待っていたかのように微笑む。
オスマンは咳払いすると、有志を募った。

「では、捜索隊を編成する。我と思う者は杖を掲げよ！」
だが、誰も杖を掲げようとはしない。
困ったように顔を見合すだけであった。

「ん？どうした、フーケを捕えて名を上げようとする貴族はおらんのか！」

オスマンは更に言うが、誰も杖を掲げない。
やっぱり口だけの腰抜け揃いか。
すると、一人の少女が杖を上げた。

「私が行きます！」

ルイズが申し出た。

「ミス・ヴァリエール！？何をしているのです！？貴女は生徒ではありませんか！ここは教師に任せて……」

「誰も掲げてないじゃないですか！」

シユヴルーズがルイズをたしなめ様とするが、ルイズに一蹴された。
へえ、やっぱりルイズは度胸あるな。こいつらよりよっぽどマシだぜ。

すると、キュルケも杖を掲げた。

「ミス・ツエルプストー！？君は生徒じゃないか！」

コルベールが驚いた声を上げる。

「ふん、ヴァリエールには負けられませんわ」

キュルケはつまらなそうに言う。

キュルケが杖を掲げるのを見て、タバサも掲げた。

「タバサ！？あなたはいいのよ、関係ないんだから」

キュルケがそういつたら、タバサは短く答えた。

「二人が心配」

「ありがとう、タバサ」

「それに…」

「ん？」

何だ？タバサの奴、俺の方を見てる様な？

そんな様子を見て、オスマンは笑った。

「そうか、では頼むとしようか」

「オールド・オスマン！私は反対です！生徒たちをそんな危険に晒すわけには！」

「では、君が行くかね？ミセス・シュヴルーズ」

「い、いえ…私は体調が優れませんので…」

やっぱ口だけだな。

「それに、彼女たちは敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くして「シュヴアリエ」の称号を持つ騎士だと聞いているか？」

教師達は驚いたようにタバサを見つめた。

そのタバサは返事もせずにはげつと突っ立っている。

「本当なの？タバサ」

キュルケも驚いている。

「なあルイズ、シュヴァリエって何だ？」

ザンクロウはルイズに尋ねた。

「シュヴァリエっていうのは、王室から与えられる爵位としては最下級なんだけど、他の位の低い爵位と違って純粹に業績に対して与えられるものなの。つまり、実力の称号ってことよ。私たちの歳で持つてる人なんて滅多にいないわ」
「なるほど」

つまりタバサは、口だけのこいつらとは違って、実力のある奴って事だな。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？」

キュルケは得意気に髪をかきあげる。

そして、ルイズが自分の番だと言わんばかりに胸を張った。

だが、オスマンは困っていた。

寝める所がなかなか見つからなかったのだ。

コホン、と咳をすると、オスマンは目を逸らしながら言った。

「その…ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール家の息女で…その…うむ…なんだ、将来有望なメイジと聞いているが？」

おいおい…言葉が出てねえぞ爺さん。
するとオスマンはザンクロウの方を向いた。

「おお、そうじゃ！しかもその使い魔は、平民ながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが」

おいジジイ、ルイズの褒める所が見つからなかったからって俺を出すなよ。

ルイズの方も納得がいかない顔をしていた。
更に、コルベールが興奮した調子で、オスマンの言葉を引き取った。

「そうですね！なにせ、彼は…」

オスマンは慌ててコルベールの口を塞いだ。

「むぐ、はあ！？いえ、なんでもありません！はい！」

教師達はすっかり黙ってしまった。
オスマンは威厳のある声で言った。

「この3人に勝てるという者がいるなら、一步前に出たまえ」

誰もいなかった。

結局腰抜け揃いかこの先公は？

オスマンは、ザンクロウを含む4人に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

「杖にかけて！」

ルイズ、キュルケ、タバサの3人は、真顔になって直立し、そう唱和した。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじゃ。魔法は目的地につくまで温存したまえ。ミス・ロングビル!」

「はい、オールド・オスマン」

「彼女たちを手伝ってやってくれ」

ロングビルは、頭を下げ、

「もとよりそのつもりですわ」

と、告げた。

そして俺達は、フーケの隠れ家へ向かう為、馬車に乗って森の中を進んでいた。

一応デルフも持ってきた（必要無いけど体裁として）。

ちなみにキュルケが買った剣は、襲撃された時に瓦礫に埋もれた時に折れていたという。やっぱ買わないで良かった。

あつ、そうだ。

ザンクロウは、前から疑問に思っていた事を聞いてみた。

「なあルイズ、魔法が使えるって事は、フーケは貴族なんだろう？何で貴族が泥棒なんかやってんだ？」

「メイジが全員貴族というわけじゃありませんわ」

ロングビルが答えた。

「様々な事情で、貴族から平民になった者も多いのです。その中には身をやつして傭兵になったり、犯罪者になったりする者もありま

すわ。この私だって、貴族の名を無くした者ですし」
「えっ!?!」

ロングビルの素性に驚くルイズ。

「だって、ミス・ロングビルはオールド・オスマンの秘書なのでしょ?」

「オスマン氏は、貴族や平民といった事に拘らないお方ですから」
「へへ、あの爺さんがねえ」

するとキュルケはロングビルに尋ねてきた。

「では、どういった事情で貴族の名を?」

黙りこむロングビル。

「いいじゃないの、教えて下さいな」

「ちよつとキュルケ、止しなさいよ。昔の事を根掘り葉掘り聞くなんて」

「暇だからお喋りしようと思っただけじゃないの」

「あんたの国じゃどうか知らないけど、聞かれたくない事を無理矢理聞き出そうとするのはトリスティンでは恥ずべき事なのよ!」

もつともだな。

「つたく、あんたがカツコつけたおかげでとんだとばっちりよ。何が悲しくて泥棒退治なんか」

「とばっちり?あんたが勝手に志願したんじゃないの!」

「あんた一人じゃ、ザンクローウが危険じゃないの。ねえ、ゼロのルイズ」

「どうしてよ！」

「あの大きなゴーレムが現れたら、あんたはどうせ逃げ出して後ろから見てるだけでしょ？ザンクロウを戦わせて自分は高みの見物。そうでしよう？」

「誰が逃げるのよ！フーケなんて、私の魔法で何とかしてみせるわよ！」

「魔法？誰が？笑わせないで！」

ああ…うぜえ…。

こんな所で女同士の下らないケンカに巻き込まれてんのか俺は？ザンクロウはそつと移動し、本を呼んでるタバサの近くに寄った。つかよく気持ち悪くならないなタバサ？

「ちよつくらごめんよ」

「いい」

「やっぱこっちは静かだな。向こうは煩いのがいるからな」

タバサはコクリと頷いた。

「ふあゝあ…タバサ、着いたら起こしてくれ」

ザンクロウは昼寝し、馬車はいつの間にか深い森の中に入っていた。

「起きて」

「あつ？もう着いたのか？」

「ここから先は歩いて行きましょう」

ロングビルの提案に乗り、全員で小道を歩き始めた。

「なんか、暗くて怖いわ…」

キュルケがザンクロウの腕に絡み付いてきた。

「あんまくつつくなって」

「だってー、すぐー、怖いんだものー」

「（嘘くさ…）」

ザンクロウは、キュルケの仕草に小声で呟いた。

一行は開けた場所に出た。森の中の空き地といった風情である。およそ、魔法学院の中庭くらいの広さだ。真ん中に、確かに廃屋があった。元は木こり小屋だったのだろうか。朽ち果てた炭焼き用らしき窯と、壁板が外れた物置が隣に並んでいる。

5人は小屋の中から見えないように、森の茂みに身を隠したまま廃屋を見つめた。

「私の聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

ロングビルが廃屋を指差して言った。

人の住んでいる気配はまったくない。フーケはあの中にいるのだろうか。

廃屋からこちらの姿が見えないように隠れつつ、タバサは作戦を練った。

まず、偵察兼囷が小屋に向かい、中の様子を確認する。

次に、もし中にフーケがいればこれを挑発して外におびき出す。小屋の中では、得意のゴーレムが作りだせないからだ。

そしてフーケが外に出た瞬間を狙い、魔法で一斉に攻撃して一気にフーケを無力化する。

以上が作戦の流れだった。

「で、偵察兼囷は誰がやるんだ？」

ザンクロウはそう言ったら、

「すばしっこいの」

タバサがそう言ったら、皆ザンクロウを見つめてきた。

「俺かよ…」

めんどくせえ…。

「頼むわよザンクロウ！」

「へいへい…じゃ行ってくるよ」

ザンクロウは身を低くして、小走りで小屋の前まで走り、ドアの前に立った。

「オルアアアアアツ…！」

ザンクロウはあろう事か、ドアを蹴破った。

「『ええー…』っ?!?!?」「『」

ルイズ、キュルケ、ロングビルは驚きのあまり叫んでしまった。
ザンクロウは小屋の中を見た。

「ふむ…おーい、誰もいないぞ！」

するとルイズがザンクロウ目掛けて駆け出した

「こんのバカ犬ー！ー！！」
「うをつ！？何すんだよルイズ！」
「何でいきなり蹴破んのよ！中にフーケがいたらどうすんのよ！」
「いきなりの奇襲だから相手も怯むだろ？」
「だからって蹴破る普通！」
「普通じゃないからな」
「屁理屈言うな！」

3人はザンクロウとルイズの漫才に啞然としていた。「漫才じゃねーよ・ないわよ」！」。タバサ、ザンクロウ、キュルケが小屋の中に入って行った。ルイズは外で見張り、ロングビルは周辺の偵察を行った。

「手掛かりが無いが、一応調べてみましょう」
「あればの話だがな」

小屋の中を調べる3人。
するとタバサは近くの箱に気付き、中を調べてみると、

「破壊の杖」
「えっ？」

タバサは、箱に入ってた破壊の杖入りの箱を抱えた。

「ええー！っ！？」
キュルケは酷く驚いた。

「あっけなく見つかったな？」
「確かに箱は同じだけど……」

するとキュルケは中を見ようと箱の鍵を開けた。
その瞬間、

「キヤアアアアアア！！」

「ルイズ！？」

ルイズの悲鳴が聞こえて外に出ようとしたら、小屋の屋根が吹き飛んだ。

屋根が無くなったから空が良く見えるので、ゴーレムが襲ってきた事がすぐに分かった。

「ゴーレム！？」

タバサが真つ先に反応し、杖を振って魔法を放ったが、ゴーレムはびくともしない。

続いてキュルケが胸に挿した杖を引き抜き、魔法を放ってゴーレムを火炎に包んだが、まったく意に介さない。

「やっぱ無理よ、こんなの！」

キュルケが叫んだ。

「退却」

タバサがそう呟き、キュルケと一緒に逃げ出した。
ゴーレムはザンクロウ目掛けて殴りかかった。

「俺に形のある物は効かねえ」

すぐさま時のアークでゴーレムの腕の時を進ませて土くれにした。

「さてルイズは、いた……って何やってんだ!？」

ザンクロウは、ルイズが魔法でゴーレムの背中を攻撃（爆破）していた。

その結果、一部分しか欠けなかった。

「逃げるルイズ！」

「嫌よ！あいつを捕まえれば、誰ももう私をゼロのルイズとは呼ばないでしょ！」

「止める、お前の敵う相手じゃねえだろ！第一魔法なんかまともに！」

ルイズは高らかに言った。

「私は貴族よ！魔法が使える者を貴族と呼ぶんじゃない、敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶのよ！ゼロのルイズなんかじゃないんだから！」

ルイズはまた魔法を放つが、効果はイマイチのようだった。容赦なく振り上げるゴーレムに怯むルイズ。

「あのバカ！」

ザンクロウは急いでルイズの下に走った。間一髪ルイズの救出に成功したザンクロウ。

「邪魔しないで！」

パンツ

と引っ叩く音がした。

ザンク로우がルイズを引っ叩いた音だった。

「貴族だから何だ！死んだら終わりだろうがバカが！」

すると、ルイズは泣き出した。

「だって…いつも…いつも皆から馬鹿にされて…悔しくて…逃げたらまた馬鹿にされるじゃない！ここで逃げたら…またゼロのルイズだからって…」

泣きだしてるルイズに殴りかかるゴーレム。

空気読めよ土くれが！

またザンク로우はゴーレムの腕を土くれに変えた。

「それにこうでもしないと…私、あなたのご主人様としての資格なんてないもの…」

「はっ？」

「フーケを捕まえるくらいしないと…私はあるに相応しくないもの！」

「んな事気にしてんのかお前？」

「だって…あなたは私なんかよりずっと凄いもの。存在も…魔法も…何もかも…私はあるみたいないない使い魔を得られて、本当に運が良かった…」

「ルイズ…」

「それに比べて私はなに？相変わらず爆発しか起こせないし…今だってこうやってあなたに助けられた…そして誇りさえ失ってしまつたら…私には何も残らない…本当にゼロになっちゃっう！」

「……………」

泣いてる女ほどめんどくせえ事は無いな。こいつは俺が思っているよりも弱い存在：いや女の子だな。

だが、誰よりも強い意志があるな！

すると、いつの間にかタバサとキュルケが乗せたシルフィードが側に来ていた。

「乗って」

タバサがそう言った。

ルイズをシルフィードに乗せた。

「あなたも」

「いやいい、お前らは先に行ってる！」

「ザンクロウ！」

「良いから行け！」

シルフィードは飛びあがった。

「悔しいからって泣くか？俺がすごいから焦るか？あんな涙見せられちゃ、黙っていらねえじゃねえか！」

ザンクロウは背中に背負っていたデルフを抜いた。

「おっ、出番か？」

「ああ、お前の初陣だ」

ザンクロウは、いつの間にか両腕が再生したゴーレムを睨みつけた。

「土つくれが、舐めんな！」

ザンクロウはゴーレム目掛けて駈け出した。

「こちらら、ゼロのルイズの…使い魔だゴラァー！ー！ー！」

ザンクロウは殴りかかったゴーレムの腕を斬った。

しかし、ゴーレムの腕は再生を始めた。

「さつきから元に戻りやがって、吹き飛ばしてやる！ブレビー！ー！」

切っ先をゴーレムに向けた途端、ゴーレムの頭が爆発した。

「何だあ！？いきなり爆発したぞ！？」

「魔力を詰めた木の実を起爆させる魔法、ブレビーだ」

「そんな魔法聞いた事無えぞ！」

「当り前：おっ？」

爆煙が晴れると、頭と右肩部分が吹き飛んでいたが、すぐにまた再生し始めた。

「ちっ、浅かったか」

「相棒来るぞ！」

「喰らうかつ！」

ザンクロウが手をかざすと、ゴーレムの腕がまた土くれになった。

「さつきからどうなってるんだ相棒？お前さんがやってんのか？」

「ああ、俺は神殺し、ゴッドスレイヤーだからな！」

「いっどすれいやー？」

「話は後だ！」

またゴーレムの体が再生し、ザンクロウに襲いかかった。

ルイズサイド

「どうなってるの！？いきなり爆発したけど…ルイズ、あなたがやったの？」

「ううん、私じゃないわ」

「彼がやった」

「ザンクロウが！？でも彼は平民じゃ？」

そういえば、ザンクロウは私の爆発を神の魔法って言ってたけど、本当に爆発する魔法があったなんて。今度はゴーレムの腕を土くれに変えた。

「あれ？何もしてないのに土くれになっちゃった？」

「あれって…」

もしかして時のアーク？

「彼は何か特別の力がある」

「！？？」

「ザンクロウに特別な力があるって事？」

た、タバサって、たったあれだけでザンクロウが只者じゃないって気付いたのかしら！？

「もしかしてザンクロウって、先住魔法が使えるの！？？」

「前に森の中で使ってたの見た」
「えっ!?!」

ちよつとザンクロウ!?! あんた、力使つてるとこ見られてるじゃない!?!

「ねえルイズ! ザンクロウって先住魔法の使い手なの?」

「えつと…その…」

「詮索は後、彼を援護しないと」

「そ、そうよね! タバサ、何とか出来ないの?」

「ちよつとルイズ!?!」

私はこのまま見てるだけじゃ嫌! 何か私に出来る事は無いの?…ん?
ルイズはある物を目にした。

「これだわ! タバサ、それ貸して!」

ルイズは無我夢中で飛び降りた。

「ちよつ、ルイズ!?!」

慌てるキュルケだが、タバサは冷静にルイズにレビテーションを掛けた。

ルイズは急いで持ち出した箱、破壊の杖を取り出した。

「ザンクロウから離れなさい!」

破壊の杖を抱えたルイズはザンクロウの下へと降りていった。

ザンク로우サイド

「まったく、ウザッてえ！」

斬っても壊しても土くれにしてもすぐに直りやがる！

「ザンク로우から離れなさい！」

「えっ!?!」

振り返ると、ルイズがゆつくりと降りてきていた。

おい、マジかよ!?!

ザンク로우は、ルイズの抱えている物に驚愕した。

あれって、ロケットランチャーかよ!?!

そう、破壊の杖はM72ロケットランチャーと呼ばれる代物だった。何であれがこんな所にあるんだ!?! 異世界だろ!?! 何で地球のモンがここにあるんだよ!?! 俺か? 俺の所為なのか!?! 俺が係わった所為でアレがあるのか!?!

ザンク로우は、原作で登場している事を知らなかった。

ルイズは着地し、ロケットランチャーをブンブン振り回した。

「えいつ! えいつ! あれ?」

「使い方解つてねえじゃねえか!?!」

「ホントに魔法の杖なのこれ?」

「仕方ねえ!」

ザンク로우はルイズの方に駆け出した。

「ザンク로우、これ: 使い方が解んない!」

「俺だつて解んねえよ!」

「ええっ!?!」

「何しに来たんだよ!？」

「だってえ……」

「ちっ、しゃーねえなあ……」

そろそろ腹減ってきた事だし、腹ごしらえするか。

ザンクロウはシルフィードが飛んでる方を向いた。

「キュルケエー！お前の炎を俺にぶつけろおーっ!!」

「ええっ!？ちよつとザンクロウ、あんた何言ってるのよ!？」

ザンクロウの言った事にルイズは困惑した。

「ええっ!？あたしの魔法を!？」

「キュルケ、撃って」

「ちよつとタバサ!？あなたまで!？」

「良いから撃て!」

「も、どうなっても知らないわよ!」

キュルケは炎をザンクロウ目掛けて放った。

「待ってたぜ!んがあ!」

炎そのままザンクロウの口に吸い込まれるように入ってしまった。

「んぐっ、んぐっ、んぐっ!」

「ぎ、ザンクロウ!？あんた、炎を……」

「た、食べてるの!？」

「やっぱり」

「んぐっ…ぷはあっ、ふう〜。良い炎だな、程良い火加減で敵を焼け尽くす感じの炎だ。さて、食ったら力が湧いてきた!ウオオオオオ

オオオオオツ!!」

ザンクロウの体から炎が噴き出した。

「ぎ、ザンクロウ…あんだ…」

「さくて、いっちょおっぱじめるか！ウオオオオオオ!!」

ザンクロウは再びゴーレムに向けて駈け出した。

「西の果てから東の果てを焼き尽くせ…神の息吹…」

ザンクロウは両手に炎を溜め込んだ。

「喰らえ！炎神えんじんの、カグツチイツ!!」

ザンクロウは巨大な炎の球を出し、ゴーレム目掛けて放った。

ドゴオオオンッ

凄まじい音を立ててゴーレムの体が半壊した。

「まだ残ってんのか？」

「ザンクロウ！あんだのそれって!？」

ルイズは訳が解らずにいたが、ザンクロウは答えた。

「ああこれ？俺は魔法を食う事でその属性をフルに扱える事が出来るんだよ」

「で、出鱈目じゃないの!?魔法を食べるなんて!？」

「それが俺の魔法、神の魔法だ!」

半壊して、また再生し始めたゴーレムの方に向いたザンクロウ。

「これで終わりだ！」

ザンクロウは思いつきり口を開けた。

「炎神の、怒号どくろオツ!!!」

ザンクロウの口から強力な熱線（エネルギー波）を吐いた。

ドゴオオオオオオオンッ

先程よりも凄まじい爆音を立てて、ゴーレムの体は完全に吹き飛んだ。

後に残ったのは、炎神の怒号で出来た抉れた地面だけだった。

「す、すごい……」

「フハハハ、どうだ俺の力は？」

「すごい以外、言葉が見つからないわ……」

すると、シルフィードが降りてきた。

「ダーリンすごいじゃない！」

「どわっ!?!」

「ちよっとキュルケ！あんた何してんのよ……」

キュルケに押し倒されるザンクロウ。

そんなキュルケに怒鳴るルイズ。

「フーケはどこ？」

とタバサは呟いた。

「そういえば!？」

「ゴーレムがいたって事は、まだこの近くに!」

「皆さん!」

そこにやって来たのは、ロングビルだった。

「ミス・ロングビル、フーケはどこからあのゴーレムを操っていたのかしら？」

キュルケがそう尋ねると、ロングビルは分からないという様に首を横に振った。

ん？何か違和感がある様な？それにしても遅い登場だな？後で聞いてみるか。

「とにかくよう、俺らの目的は破壊の杖でフーケ討伐じゃねえんだ。とつとと帰るぞ」

「でもまだフーケがいるかもしれないし…」

「さっきのダーリンの攻撃でビビって逃げちゃったんじゃないの？」

「あれは強力」

「フー訳で、帰るぞ」

「…うん」

「それでは、学院に戻りましょう」

俺達は破壊の杖を、ロケットランチャーを持って魔法学院へと帰った。

ロングビルサイド

何だっただよあの使い魔は！？あんなに強い上に魔法も使えるなんて聞いてないよ！？おかげで計画が台無しじゃないか！？

まず最初に破壊の杖を一時奪還した後、私のゴーレムを使って破壊の杖の実演をさせるといふ段取りだったのに、全部パーじゃないか！結局破壊の杖は使えずじまいで終わり、学院に戻る事になってしまふなんて、私もヤキが廻ったねえ。

あの使い魔が側にいる限り、手が出せなくなっちまったねえ。

ザンク로우サイド

学院に戻った俺達は、爺さんの所に呼び出された。

学院長室にいるのは、俺、ルイズ達、爺さん、ツルツパゲ、ロングビルの7人だ。

「うむ、よくぞ破壊の杖を取り戻してくれた」

「ですが、フーケは取り逃がしてしまいました…」

「いやいや、こうして取り戻してくれただけで充分じゃよ。フーケを取り逃がしはしたが、破壊の杖は無事に宝物庫に収まった。一件落着じゃ」

オスマンが一人ずつ頭を撫でるが、ザンクロウはされなかった。

「君達のシュヴァリエの爵位申請を宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろう。といっても、ミス・タバサはすでにシュヴァリエの爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた」
「本当ですか！？」

「でもオールド・オスマン、私達はフーケを逃がしてしまっただけですよ？それなのにシユヴァリエなんて…」

「何を言うておる。学院の宝を取り返しただけでも爵位を受ける資格は充分じゃ。いいから受け取っておきなさい」

オスマン学院長は微笑んだ。

ルイズはザンクロウを見て暗くなっていた。

「…あの、オールド・オスマン」

「何じゃね？」

「ザンクロウには、何も無いんですか？」

「残念じゃが、彼は貴族ではない」

「で、ですが…ザンクロウがいなかったら、私たちはここにはいませんでした！」

ルイズは納得がいかなかったが、

「いらねえよルイズ」

と言ってきた。

「でも、戦ってたの全部あんたじゃない！」

「何もいらねえって。ただ、爺さんに聞きたい事があるってだけだが…」

「…うむ。さて、堅苦しい話はこれくらいにして、今日の夜はフリックの舞踏会じゃ。こうして破壊の杖も戻って来た事じゃし、予定通り執り行う」

「そうでしたわ！フーケの騒ぎの所為ですっかり忘れておりました！」

「今日の舞踏会の主役はキミ達三人じゃ。用意してきたまえ。思い

つきり着飾ってくるのじゃぞ？」

三人は礼をしてドアに向かうが、

「ザンクロウ、後であなたの事教えてね？」

「私も」

「ええっ!？」

とキュルケが言った事にタバサも同意し、ルイズは慌てだした。そして三人は退室した。

「それで、ワシに聞きたい事があるのようじゃな？」

「ああ、一応二人にも聞いて貰いてえ事がある」

「我々もですか？」

「後、出来れば他の連中には聞かれたくねえ事だから、そうゆうのを識別できる魔法ってあるか？」

「ディテクト・マジックですね？少々お待ち下さい」

ロングビルが部屋中にディテクト・マジックを掛けた。

「特に問題はありません」

「そうか、では君の話…の前に、ワシからの質問に答えてくれんかの？」

いきなりジジイの方から先に質問しやがったよ!？」

「お主は一体何者なんじゃ？」

「何者…というと？」

「失礼かと思いますが、君にディテクト・マジックを掛けてみたが、君からは膨大な魔力を感じました。君はメイジなのか？」

「なるほど。だが残念ながら俺は人間のメイジじゃない」
「人間の…とは？」
「俺は…」

ザンクロウは、手に炎を出した。

「神だ！」
「なっ!？」
「炎がつ!？」
「お主!？」

三人は酷く驚いていた。

「君はまさか、先住魔法を使えるのか!？」
「これはその先住なんとかじゃねえ」
「しかし、杖も使わずに魔法を扱えるなんて…」
「あなたは、エルフ…なんですか？」
「俺はエルフじゃねえ、俺は神だ！」
「…神!？」

三人はまた驚いていた。

「という事はまさか…あなたは始祖ブリミルの生まれ変わりですか!？」
「…!？」
「いや、ブリミルって人間じゃねーのか？俺は正真正銘、神だ！」
「なんと…」

オスマンとコルベールとロングビルは困惑していた。

「信じられねえなら他にも見せてやろうか？」

ザンクロウはコルベールの杖を時のアークで朽ちらせた。

「なっ、杖が！？」

「おまけに」

ザンクロウは再び時のアークで杖を元に戻した。

「なんと！？杖が元に！？」

「こんな事お前らに出来るか？」

「錬金とは違うのう…なるほど、それがお主の力の秘密か」

「そうだ。俺への質問はここまでか？」

「うむ、お主の聞きたい事とは何じゃ？」

ようやく本題か…。

「あの破壊の杖、あれはあんたらが言う様な魔法の杖じゃねえ」

「破壊の杖が、魔法の杖では無いですと！？」

ツルツパゲ…コルベールが驚く様に言った。

心なしかロングビルも驚いていたようだった。

「魔法の杖じゃないとすると、あれは一体何じゃ？」

「あれは特殊な使い方をしないと発動するように出来ている武器だ」

「武器！？」

「なあ爺さん、教えてくれ！あれは本来この世界には無い筈の武器だ！どこで手に入れたんだ？」

そうだ、これが今知りたい事だ。

「ふむ、別の世界とは？」

ま、当然の疑問か。

「俺はこことは違う世界、異世界から召喚されたんだ」

「異世界！？」

「ああ、そこには魔法が発達した世界やら、技術が発達した世界やらなんやらが、結構たくさんあったぞ。その異世界の内で、そんな武器を見た事がある」

「ふむ、異世界の武器か…なるほどのう…」

「異世界には、技術が発達した世界があるのか…」

「あれが只の武器だなんてなあ…（小声）」

三人はそれぞれ考え込んでいた。

「ザンク로우君、君はあの破壊の杖をどこで手に入れたかと聞きたかったかの？」

「ああ」

「あれは、ある男の形見なんじゃ」

「……」

「もう30年程前になるかのう。森を散策していた私はワイヴァーンに襲われてな、そこを救ってくれたのが、破壊の杖の持ち主の男、私の命の恩人じゃった。見た事の無い奇妙な格好をしていた」

「その奇妙な格好とは？」

「緑色の防具を実に纏っておった」

緑色の防具…考えられるとしたら、俺の前世の故郷、日本の自衛隊か…。

でも何で地球とは関係ないこの世界に日本の物があるんだ？

「その男は酷い怪我を負っていた、私は彼を学院まで連れて行き手厚く看護したのだが…」

「死んだのか…」

その言葉に頷くオスマン。

「結局何者なのか…どこから来たのか分からなかった。男は破壊の杖を2本持つておつてな、私を救った1本は男と一緒に墓に、もう1本を私が宮廷に献上したんじゃないよ」

「破壊の杖に、そんな曰くいわがあつたとは…」

汗をかきながら言うコルベール

「それが破壊の杖の所以ですか…」

ロングビルも少し俯いていた。

「彼はベッドの上で、亡くなるまでうわ言のように繰り返しておつた。「ここはどこだ。元の世界に帰りたい」とな。きっと君の言う異世界の住民なのじゃろうな」

「最後にもう一つ、誰がその人をこの世界に呼んだんだ？」

「…解らん。どんな方法で彼がこの世界にやって来たのか、最後まで解らんかった」

「…そうか」

いや、今更何懐かしがってんだよ俺…もう今の俺は地球とは関係無えんだ…。

するとオスマンは、

「お主のその胸のルーン…」
「ん？」

胸のルーンがどうかしたのか？

「このルーンがどうかしたのか？」

「そのルーンは、伝説の第四の使い魔の印じゃよ」

「第四の使い魔？」

何で4番目？

「そうじゃ。言い伝えによればその使い魔は、始祖ブリミルが使役した4体の使い魔の中でも最強と言われ、その存在は名を記す事すらはばかれるとか」

「最強の使い魔か」

「ある意味、君にぴったりだと思っがの」

「「確かに…」」

コルベールとロングビルは頷いた。

確かに俺もそうかもって思っただけどよ…。

「もしかしたら、お主がこの世界に呼ばれた事と、その第四の使い魔の印はなにか関係があるのかもしれない」

「ふん。ま、ルイズの使い魔として呼ばれたからには、何か意味はあるんだろうけど？」

「大した力になれんですまん。ただ、これだけはハッキリとっておく。私はお主の味方じゃ、ザンクrou君」

「ああ」

「ありがとう、ワシの恩人の杖を取り戻してくれた。改めて礼を言っぞ」

意外と気の良い爺さんだな。

「何じゃっいたらこつちの世界に住む気はあるかの？なに住めば都じやし、嫁さんだってすぐに見つかるじゃろつて」

折角の良い空気が台無しだ…。

その後、きりの良い所で話を終えたが…、

「使い魔君、少しお話してもよろしいですか？」

ロングビルが話しかけてきた。

こつちも丁度話がしたかったからな。

場所はヴェストリの広場で話す事になった。

「で、話って何すか？」

「あなたの力についてです」

「さつき見せた力の事か？」

「はい、それ以外にも爆発したり、魔法食べたりなどの事も…」

あれ？おかしいぞ！

「ちよつと待て！何であんたがブレビーの事や炎神の力の事を知ってるんだ？」

「！？」

ロングビルは慌てだした。

「それはあの時、そう、駆け付けた時に遠くから…」

「それだったら炎神の力はともかく、ブレビーの方は割と最初の方

だったぞ」

「うっ！？」

違和感の正体はこうゆう事だったのか！

「今思えば、あんたの言ってる事は結構矛盾だらけなんだよ！」

「む、矛盾だらけ…ですか？」

「早過ぎたんだよ！あんたが情報を持って帰るまでの時間がな！馬で4時間なら、破壊の杖を強奪した後、例の小屋で破壊の杖を置き、そしてまた戻ってくるまで時間が、丁度8時間なんだよ！」

ザンクロウは確信を持って言った。

「そうだろ、土くれのフーケ！」

「…ふっ、私とした事が、とんだへマをしちまったねえ」

喋り方が変わったな。本来のロングビル…いやフーケになったという事か。

「認めるんだな、自分がフーケだって事に」

「ああ、そこまでバレてるんなら隠す必要はないさ」

潔いな。

「やけに堂々としてるじゃねえか？」

「出来る事ならアンタを亡き者にして逃亡…と行きたいとこだけど、アンタは魔法を食うんじゃメイジにとって天敵だからね。無駄な事するよりも、大人しくした方が無難だねアンタの場合は」

「なるほどな。話を戻すがフーケ、お前の目的は破壊の杖の使い方か？」

「ああそうさ、折角手に入れたつてのに使い道が解らないんじゃない宝の持ち腐れさ。だからここの教師たちに実演をして貰おうと思ったのさ」

「だが、ここの教師達は口だけの腰抜け揃いで当てが外れたと？」

「ああ、あの嬢ちゃん達には力の差があったから追い返して、次に教師達が来ればと思ったんだが、アンタのおかげでとんだ無駄骨を折っちまったからね」

「そいつは悪かったな。んでもし使い方が解つたら、破壊の杖をどつする気だつたんだ？」

「オークションに出して高く売るつもりだつたさ。でもまさか、魔法の杖じゃなくて、只の武器とはねえ……」

「おまけに一発限りの使い捨てだから、一度使ったら只の筒になる訳だしな」

「えっ！？あれ一発だけしか出来ないのかい！？」

大砲は大抵一発ずつしか打てないだろ？

「何だ…結局骨折り損のくたびれ儲けか……」

随分と金が欲しいみたいだな？

「つーか盗にまでして金が欲しい何て、ゲルマニアで貴族として返り咲きたかつたのか？」

「そんなんじゃないよ！」

「うをつ！？」

何だ！？フーケの奴、いきなり怒鳴りこんで！？

「アンタには分からないだろうけど、私は泥を被つても金を手に入れなきゃいけないんだよ！」

「どうしたんだフーケ！？その言い方だと、病気で苦しんでる親が家族でもいんのか？」

「！？…妹が…いるんだ。血は繋がってないけどね」

「妹！？じゃあお前は、今まで妹を養う為に泥棒を！？」

フーケの奴、実はかなりの苦勞人だったのか！？

「正確には、妹と孤児達の為さ」

「孤児？」

「妹が住んでる所は孤児院になってて、親を亡くした子供たちを引き取って暮らしているんだ」

「という事は、アンタはその孤児院に仕送りをしてるって事か！？」

「そういう事さ。もつとも、最近警備が厳しくて盗みにも行けなくなってきたから、仕送りが出来なくなってきたからね…」

こいつ…今まで妹や孤児達の為にそんな苦勞を…、

「ここいらが潮時になってきているから、ガリアかゲルマニアに行つて盗んでくしかない…って！？」

ダアー…（滝の様な涙の音）

ザンクロウは、フーケが引くくらい泣いていた。

「ちょっとアンタ！？何泣いているんだい！？」

「フーケ…お前がそんな事情を抱えてたなんてな…ウオオオオ…」

「何でアンタがそんな号泣してるんだい！？同情なら止してくれ！」

「同情じゃねえよ！そんな話を聞かさとあっちゃあ、俺も協力してやらあ…！」

「何だいこのテンションの違いは！？」

「金がいるんだっただな？好きなだけ持ってけ！」

ザンクロウは、具現のアークで金銀財宝を人の身長ぐらいに多く出した。

「なっ！？どうなっただいコレ！？」

「これが俺の神の魔法の一つ、具現のアークだ！俺の好きなモンを具現化させる事が出来る魔法だ！」

「何その夢の様な魔法は！？てかこんな事も出来たのかいアンタは！？」

「さあフーケ、遠慮は無しだ！好きなだけ持ってけ！」

「あははは…もう笑うしかないねこの状況…」

とにかく俺は、フーケの孤児院のパトロンとなった。

フーケサイド

さっきは驚いたよ。

まさか財宝を造り出しちゃうなんて、さすが神と名乗るだけあるね。一応全部は持ってけないから、価値がありそうな物を片手で持てるぐらいに絞っておかないとね。

確かにあいつがいれば仕送りの問題は無いけど…なんか貸しが出来ちまったね。

「ザンクロウか…何か興味が湧いてきたじゃない…」

フーケは…ロングビルは…いや、マチルダはザンクロウに惹かれた様だ。

ザンク로우サイド

フーケ：ロングビルと別れた後、何とかパーティに間に合ったみたいだ。

バルコニーに出ると、鞆からデルフが飛び出た。そっぴやずつと背中に背負ってたんだっただな？

「良いのかい相棒、フーケの事黙っちゃまって？」

「良いんだよ！それにあいつが捕まったら、残った孤児達はどんなるんだよ！」

「まっ、相棒が良いんなら別にオイラが言う事も無いしな」

「だったら黙っててくれデルフ」

デルフを鞆に押し込んだザンク로우。

「キュルケは色々な男達に囲まれて、タバサは踊りよりもメシか…」

実はさつきキュルケがやってきて「後で踊りましょう」と言って囲ってた男達と踊り、タバサはここに来た時から料理と格闘していた。それぞれが楽しんでいた。

「皆ドレスやタキシード…俺ってめっちゃ場違いだな…」

「あら、踊らないのかいザンク로우」

「ん？」

声をかけたのは、ドレス姿のロングビルだった。

「へへ、似合ってるじゃん」

「意外だね、褒めてくれるのかい？」

「こつゆつ時は、素直に寝るモンだろ？」

「ふふっ、ありがとございますわ」

そう言つてホールの方へと去つていった。

「裏表はつきりしてるな」

ロングビルとフーケになつてたなさつき。

キュルケ程じゃないが、ロングビルも結構人気な為、ダンスの誘いが殺到してた。

すると、衛士達がファンファーレをし、ルイズの到着を告げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな~~~~り~~~~」！

ザンクロウは息を飲んだ。

ルイズは桃色の長髪を纏め、純白のパーティードレスに身を包んでいた。

肘まで覆う純白の手袋が、彼女の高貴さをより演出し、胸元の空いたドレスがづくりの小さい顔を、宝石の様に輝かせていた。

「あれが…ルイズか？」

へへ、結構可愛いじゃねえか。

すると、今までルイズをバカにしていた男連中は、ルイズにダンスを誘おうとしていた。

「調子の良い現金な連中だな」

「それが男なんじゃねーのか？」

「違いねえな」

そして、誰の誘いをも断り続けてきたルイズが、バルコニーにいるザンクロウに近づいた。

「おお、馬子にも衣装じゃねえか」

「うるさいわね」

「楽しんでるみたいだな」

「アンタは暇そうね」

「平民が恐れ多い真似はしませんよ」

「どの口が言ってるのよ」

何だろう…この気まずさは…。

ホールでは、踊り始めている者達がいた。

「踊らないのかルイズ？」

「相手がいないのよ！」

「いっぱい誘われてたじゃねえか」

すると、ルイズはそつと手を差し伸べた。

「ん？」

「踊ってあげても、良くってよ？」

ルイズは目を逸らしながら照れた様に言った。

「えっと、こうゆう時は…何て言うんだっけ？」

「もう、私から言っわ」

ルイズは、ドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を曲げてザンクロウに一礼した。

「私と一曲踊って下さいません事、ジェントルマン」

ルイズは照れながら誘った。

ザンクロウは微笑みながらルイズの手を取った。

「謹んで…お受け、致しましょう。御主人…様？」

ザンクロウは囁みながら言った。

「ぶっ、何その受け応えは」

「しゃあねえだろ、言った事無いんだから」

「ぶぶっ、まあいいわ。行きましょ」

ルイズはザンクロウを連れてホールまで行った。

「そっぴゃあダンスなんて初めてやるぞ」

「だったら私に合わせて」

ザンクロウは、不慣れな感じでルイズと踊り出した。

「ねえザンクロウ」

「ん？」

「あんたって、ホントに神様なんだね」

「何だよ、まだ信じてなかったのか？」

「そっぴゃもないけど、でも…炎を食べてる時はびっくりしたけど…」

「そっぴゃああれは見せてなかったな。意外とイケる味だったぞ」

「いや、普通は食べられる物じゃないから火は…」

「悪い悪い」

何か緊張がほぐれた様な？

「ねえザンクロー…」

「どうしたルイズ？」

「元の世界に帰りたいって思う？」

そりゃ思うが、もう俺は新しい暮らしをしてる訳だしな。

「…いや、元々俺は故郷なんて無えし、どこ行こうが俺の勝手だけだよ。でも今は…」

「今は？」

「俺はお前の使い魔だから、お前の側にいてやる。だから気にすんな。当然だろ？」

「!？」

ルイズは急に照れ出し、

「ありがとう…(ボソツ)」

小声でそう言った。

「こりやおでれーた！相棒はてーしたもんだ！主人のダンスの相手を務める使い魔なんて、初めて見たぜ！」

バルコニーから、デルフが驚く様に踊ってる二人を見ながら言った。

ザンクロウの真価発揮（後書き）

自分がネット小説を書き始めて1年が経ちました。

途中からデルフの定番ありませんでしたね。

マチルダフラグを入れちゃいました。

学院室での会話がかなり変になってしまいました。出来ればスルーして下さい。

炎神のカグツチの件は、アニメ版を参考にしています。

正直、ザンクロウの声が残念で仕方が無い。

てつきり関智一さんか、うえだゆうじさんがやるのかと思ってました。まさかコードギアスのロイドさんが出るとは思いませんでした。次回は無能王女が出ます。

王女とザンクロウ（前書き）

かなり間が空いてしまいました。
しばらくフェアリーテイル以外の作品を再開させます。

王女とザンクロウ

ザンクロウサイド

キュルケ達には東方出身の先住魔法使いという事で通した。当然夕バサは嘘だと分かっていた。そしてザンクロウは今、

「ふわあゝあ…退屈だ…」

ルイズと一緒に授業に出ていた。

早く昼になんねえかな…つまんな過ぎて暇だぜ。

ザンクロウがそう思っていたその時にギトーがやってきた。生徒たちは一斉に席についた。

「では、授業を始める。知っての通り私の二つ名は疾風。疾風のギトーだ」

教室に静寂が訪れる。

その様子を満足気に見つめ、ギトーは言葉を続けた。

あいつは確か…宝物庫で散々罵声を言ってた奴だよな？

「さて、最強の系統は何か知ってるかね？ミス・ツエルプスター」
「虚無じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いているんだ」

こいつ、どうやらかなり傲慢な性格をしてるな。

キュルケはニヤリとし、言った。

「火に決まっていますわ」

「ほほう、どうしてそう思う?」

「すべてを燃やし尽くすからですわ」

「残念ながらそうではない」

ギトーは杖を引き抜いた。

「試しにこの私に君の得意な火の魔法をぶつけたまえ」

キュルケは一瞬怯んだが、少し本気の顔をしていた。

こいつは一度痛い目と恥ずかしい目に遭った方が良いな。

「火傷じゃすみませんわよ?」

「かまわん、本気で来たまえ」

さうで、大樹のアーケはまだ完全じゃないが、土地の魔力を使って二人のレベルを変えてみるか。

あつ、それとも人間隷属魔法ヒューマレイズであの先公の魔力を下げてみようかな? …… ipp その事両方をやってみつか。

ザンクロウは大樹のアーケで、キュルケのトライアングル(上)クラスからスクウエア(下)クラスにした。

ギトーの方はヒューマレイズでレベルを大幅に下げて、スクウエア(中)からライン(下)クラスにした。

そしてキュルケが小さな炎を出してギトーに向けて放った。

その炎が徐々に大きくなり、直径2メートル程の大きさになった。

「えっ?」

炎を出した本人キュルケは少し驚いていた。

ザンクロウの大樹のアーケでキュルケの魔力をアップさせた所為で、本来出す筈だった炎の2倍の大きさにキュルケは驚いていた。一方ギトーの方は余裕のある顔をして杖を抜き、突風を起こさせたが、キュルケの炎に飲み込まれてしまった。

「なっ!?!」

そしてそのまま炎はギトーに直撃した。

「ぎぎやああああああつ!?!?!」

炎の直撃を喰らって真っ黒になって倒れるギトー。

「あ、あら…?!い、言った筈ですよ。火傷じゃすみませんわよって」

キュルケがそう言うと、生徒達は爆笑した。

それはそうだった。ギトーは風が最強で炎に負ける訳が無いと信じて疑わなかった為、スクウエア（本当はライン）の風がトライアングル（本当はスクウエア）の炎に負けたという事実を晒してしまっただからだ。

ザンクロウも大笑いしてた。

すると、不審に思ったルイズがザンクロウに尋ねた。

「ザンクロウ、あんたまた何かやったの?」

「ははは!ああ、大樹のアーケでキュルケの魔力をスクウエア位に上げて、あのム力つく先公はヒューマレイズで魔力をライン位にまで下げただけだからな」

「あんたって、そんな事も出来たのね…人のレベルを上げ下げ出来るなんて…」

「良いだろ？あんな思い上がった奴は一度ああゆう目に遭った方が
良いんだ」

「まあギドー先生は少し嫌な感じだったから良い気味だけど…」

こいつでさえ嫌悪するほどとはな…やっぱ痛い目に遭った方が良い
な。

その時、教室の扉が開くと、コルベールが現れた。

「ぶっ！？」

ザンクロウは思わず噴いた。いや、一部の生徒も同じ様に噴いてい
た。

それもその筈、現れたコルベールはいつもの地味なローブではなく、
所々にレースの飾りやら刺繍やらと派手な部分があった。

そして何よりも注目する所は、頭に馬鹿でかいロールを巻いた金髪
のカツラがあった。

するとコルベールは、足元にある黒い物体に目が入った。

「おや？何ですこの焦げた物は？」

「ギトー先生ですわ」

キュルケがそう言ったが、コルベールは気にせず教卓の上に立った。
どうやらコルベールもギトーの事は好ましくなかった様だ。

「おっほん。今日の授業は全て中止であります！」

コルベールがそう言うと、教室中から歓声が上がった。
それを抑える様にコルベールは両手を振るった。

「え、皆さんにお知らせですぞ」

コルベールがそう言ったと同時にカツラが落ちてしまった。

「ぶほっ！？」

またザンクロウは噴いた。

ふ、不意打ちだろあれ…。

生徒側もクスクスとしていたが、

「滑りやすい」

と、タバサがバツサリと言ってしまった為、生徒達が再び爆笑した。当然ザンクロウも腹を押さえながら爆笑した。

「あなた、偶に口を開くと、言うわね」

キュルケがタバサの肩をぽんぽん叩きながら言った。

コルベールは顔を真っ赤にして怒鳴り始めた。

「ええい！黙りなさい小童共が！大口開けて下品に笑うとは、まったく貴族としてあるまじき行為！貴族は可笑しい時は下を向いてこっそり笑うものですぞ！これでは王室に教育の成果が疑われる！」

取り合えず笑い声は収まっていった。

「えーおほん。皆さん、良く聞いて下さい。本日トリスティン魔法学院にとって良き日になります。始祖ブリミルの降臨際に並ぶめ度たい日であります」

前置きは良いからとっとと話せよコルベール。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見であらせられる、我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます」

教室がざわめいた。

アンリエッタ姫殿下？って事は、この国の王女がこの学院に来るって事か？

「したがって、粗相があつてはいけません。急な事ですが、今から全力を挙げて歓迎会の準備を行います。その為、本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列する事」

生徒達は緊張した面持ちになると、一斉に頷いた。

そんなに畏まるもんかねえ？

日本育ちのザンクロウにとって、そんな大物と接する機会が皆無だった為、実感が無かった。

「諸君が立派な貴族に成長した事を姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！御覚えがよろしくなる様にしっかりと杖を磨いておきなさい！よろしいですかな！」

コルベールがそう言い終わると、教室を後にした。ギターをそのままにして。

周りがるさくなってきたな…王女ってのはそんなに美人なのか？

「姫様が…」

「ん？」

ザンクロウはふとルイズの方を見た。

「アンリエッタ姫殿下が…姫様がいらっしやる…」
「ルイズ？」

ルイズはどこか懐かしそうに呟いていた。

その後、生徒達が整列して待つ中、学院の正門をくぐって馬車がやって来た。

「あれが王女さまとやらが乗ってる馬車か？しかし遠いなあ…」

「そう…ね」

「ルイズもさつきから調子悪そうだし…ホントにどうしたんだ？」

ザンクロウが頭を傾けていた。

生徒達が一斉に杖を掲げ、小気味よい音が鳴り響いた。

正門の先にある本塔の玄関で、オスマンが姫様を迎える為に立っていた。

馬車が止まり、召使らしき人達が緋色の絨毯を敷き詰める。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなああありい
いいい！！」

呼び出しの衛士が姫様の登場を告げると、馬車の扉がゆっくりと開いた。

出てきたのは老人だった。

「…あれが…王女さまか？」

「違うに決まってるでしょ！姫殿下のお世話役のマザリーニ枢機卿
よ」

「だよな」

マジでビビった…そうだよな、第一性別が違うしよ。
マザリーニと呼ばれる老人は馬車の横に立ち、続いて降りて来る人物の手を取った。

その瞬間、生徒達の間から歓声があがった。

王女はにっこりと薔薇の様な微笑を浮かべると、優雅に手を振った。
何か無理してやってねーかあれ？

「あれがトリステインの王女？ふん、あたしの方が美人じゃないの」

キュルケはつまらなそうに呟いた。

少なくとも胸はキュルケの方がありそうだな。
その瞬間、ザンクロウの足を誰かが踏んだ。

「ふげっ!？」

踏んだのはルイズだった。

「る、ルイズ…いきなり何すんだよ…」

「今アンタ、姫様に何か失礼な事を考えてそうだったから」

す、鋭い…!？」

「ねえダーリン、どっちが綺麗だと思う?」

キュルケが尋ねてきた。

「そうだな、見た目の綺麗さなら王女さまだが、スタイルの綺麗さはキュルケだと俺は思うが?」

「あら嬉しいわね」

キュルケは満足そうだった。
ザンクロウはルイズの方を見た。

「ん？」

ルイズの顔が若干赤くなっていた。
ザンクロウはルイズの視線を辿ってみると、その先にいたのは、羽帽子をかぶった貴族の男性の姿があった。鷲の頭と獅子の体を持った勇壮な生物に跨っている。
何か気にくわねえな、あのヤロー。
ザンクロウは若干モヤモヤしていた。

「あなたの方が強い」

いつの間にか隣にいたタバサがそう言った。

「つたりめーだ」

ザンクロウもそう言った。

ふとタバサの隣にいるキュルケの方も見たら、惚けていた。

お前もかよ！？

キュルケも羽帽子を被った貴族を見ていた。

忘れてた、キュルケは取っ換え引っ換えする女だったな。

つかルイズもルイズだ、あんなヒゲ野郎のどこが良いんだよ？
部屋に戻ってもルイズは上の空だった。

「いつまでボクっとしてんだよルイズ！」

ザンクロウが怒鳴るが、ルイズは聞く耳もたなかった。

「そうかい、そっちがその気なら…」

ザンクロウは具現のアーケでクラッカーを出した。

「そりゃっ!」

ぱあーん

と強烈な音を立てても、ルイズはボーっとしていた。

「…少しはリアクションを取ってくれよ!?!こっちがバカみてえじやねーか!」

ザンクロウの虚しき声をあげた。
その時、

トン、トン、トントントン

と長く二回、短く三回のノックが聞こえた。

「ん、誰だ?」

「!?!」

ルイズはドアに向かって駆け出した。

「あっ!?!おいルイズ!?!」

そしてルイズはドアを開けた。

そこに立っていたのは、真っ黒な頭巾をかぶった女性だった。

「…貴女は？」

すると頭巾の女性が、口元に指を置いた。
静かにしてくれって意味かアレ？
そして頭巾の女性が部屋中に魔法を掛けた。

「ディテクトマジック？」

どうやら部屋中を調べてる様だ。

「どこに耳や目が光っているか判りませんかね」

頭巾の女性はそう言い、頭巾を取った。

「ひ、姫殿下！」

頭巾を取った女性は、アンリエッタ王女本人だった。
何で王女がここに来てんだ？
ザンクロウはそう思った。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

久しぶりって？ルイズとお姫さんは知り合いなのか？

「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」

そう言ってアンリエッタはルイズに抱きついた。

「姫殿下！いけません。こんな下賤な場所へお越しになられるなん

て…！」

「ああルイズ！ルイズ・フランソワーズ！そんな堅苦しい行儀は止めてちょうだい！あなたと私はお友達じゃないの！」

「もつたいないお言葉でございます。 姫殿下」

何なんだ？この小芝居臭い展開は？

「止めて！ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をして寄って来る欲の皮が突っ張った宮廷貴族達もいないのです！ああもう、私には心を許せるお友達はいないのかしら。昔馴染みの懐かしいルイズ・フランソワーズ、あなたにまでそんな余所余所しい態度を取られたら私死んでしまうわ！」

「姫殿下…！」

何か、ますます芝居臭えな…いくら王女だからって、もつと普通に喋れねえのか？

「幼い頃、一緒になって宮廷の庭で蝶を追いかけたじゃないの！泥だらけになって！」

「ええ、お召し物を汚してしまって、侍従のラ・ボルト様に叱られました」

「そうよルイズ！ふわふわのクリーム菓子を取り合って、掴み合いになった事もあるわ！ケンカになると、いつも私が負かされたわね。あなたに髪を掴まれてよく泣いたものよ」

「いえ、姫様が勝利をお納めになった事も一度ならずございました」
「思い出したわ！私達がアミアンの包囲戦と呼んでいるあの一戦ね！」

「姫様の寝室で、ドレスを奪い合った時ですね」

「そうよ。宮廷ごっこの最中、どっちがお姫様役をやるかで揉めて取っ組み合いになったわね！私の一発がうまい具合にルイズ・フラ

ンソワーズ、あなたのお腹に決まって」

「姫様の御前で私、気絶いたしました」

「「あははは！」」

…ず、随分と…アグレッシブな王女だな…しかもルイズの方も負けず劣らずのお転婆だったんだな…まあ子供のやる事だし…そうなくても不思議じゃない…か？

二人の少女時代の思い出に呆れるザンクローだった。

「その調子よルイズ。ああいやだ、懐かしくて私、涙が出て来てしまっわ」

「お〜い…そろそろ良いか？」

「あ、アンタの事すっかり忘れてたわ」

やっばな、おいてきぼりな空気だったしな。

「ルイズとどんな関係なんだ？話しの内容からだいたい想像つくが…」

「姫様がご幼少のみぎり、恐れ多くもお遊び相手を務めさせていただいたのよ」

「なるほど。要は幼馴染って事か」

だからか、普通王女と接点なんか皆無だしな。あんなに話が弾んでたんだからな。

「でも感激です。姫様がそんな昔の事を覚えてくださっているなんて。私の事など、とつくにお忘れになったかと思いました」

「忘れる訳無いじゃない。あの頃は毎日が楽しくて…何にも悩み何か無くて…」

ん？急に暗くなつたなお姫さん？

「姫様？」

「あなたが羨ましいいわ。自由つて素敵ね、ルイズ・フランソワーズ」
「何をおっしゃいます。あなたはお姫様じゃない」

「王国に生まれた姫なんて、籠に飼われた鳥も同然。飼い主の機嫌一つであちにいったり、こっちに行ったり…」

ルイズの手を取り、姫様は笑顔で続けた。

「結婚するのよ私」

「…おめでとございます」

悲しそうに言うルイズ。

「ところでルイズ・フランソワーズ、先程から気になっていましたが、そちらのお方は？」

お姫さんが俺に興味を持ったか？

「私の使い魔です」

「使い魔？人にしか見えませんが…」

当然の疑問だよな。

「えっと、人…です」

疑問形で言うなよ。実際人じゃなく神だけだよ。

「そうよね。ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変

わっていたけど、今も相変わらずみたいね」

「確かに変わってますが、この使い魔は一応私の役には立って
くれますから」

確かにつて、しかも一応つて…。

そして再び溜息を吐くアンリエッタに、ルイズが尋ねた。

「姫様、どうなさったんですか？」

「いえ、何でもないわ。ごめんなさい…あなたに話せる様な事じゃ
ないのに…」

「仰つて下さい。あんなに明るかった姫様がそんな風に溜息を吐か
れるという事は、何か込み入った事情がおりなのでしょう？」

「…いえ、やはり話せません。あなたに迷惑はかけられないわルイ
ズ」

「いけません！昔は何でも話し合ったじゃございませんか！私をお
友達と呼んで下さったのは姫様です。お友達とは、時には迷惑をか
けあつたりするものでしょう！」

「私をお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とて
も嬉しいわ」

アンリエッタは決心した様に頷いた。

どこか嘘臭い田舎芝居を見てる感じがするのは俺だけか？
するとアンリエッタがゆっくりと語り始めた。

「今から話す事は、誰にも話してはいけません」

「わかりました」

「込み入った話になりそうだな。俺は部屋の外にいた方が良いか？
「いえ、メイジと使い魔は一心同体。席を外す理由はありません」

良いのか？親友同士で重そうな話をするのに、俺が立ち合つてて？

アンリエッタは物悲しい調子で語り出した。

「実は私、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐ事になったのですが……」
「ゲルマニアですって!？」

ゲルマニアって言ったら、キュルケの故郷だったな。

「あんな野蛮な成り上がり共の国に!」

だからなのか、ルイズが嫌がってるのって。

「そうよ、でも仕方ないの。同盟を結ぶ為なのですから」

俺が聞いた話じゃ、ゲルマニアは常に新しい技術で栄えてる国……だったっけか？

古い仕来りををいつまでも縛り続けてるトリステインじゃレベルが違ってみたいだな。

地図を見ても、ゲルマニアは大きく栄えて、トリステインは凝縮してるみたいだな。

言っちゃあ悪いが、時代遅れだよなトリステインって。

それからアンリエッタは、ハルケギニアの政治情勢をルイズに語った。

アルビオンの貴族達が反乱を起こし、今にも王室が倒れそうな事。反乱軍が勝利を収めたら、次にトリステインに侵攻して来るであろう事。

それに対抗する為、トリステインはゲルマニアと同盟を結ぶ事になった事。

同盟の為に、アンリエッタ姫がゲルマニアの皇帝に嫁ぐ事になった事。

「そうだったんですか…」

ルイズは沈んだ声でそう言った。
実質政略結婚だなこりゃ。

「良いのよルイズ。好きな相手と結婚するなんて、物心ついた時から諦めていますわ」

「そんな…」

「礼儀知らずのアルビオンの貴族達は、トリステインとゲルマニアの同盟を望んでいません。わたくしの婚姻を妨げる材料を血眼になつて探しています」

「という事は、姫様の婚姻を妨げるような材料が？」

「おお、始祖ブリミルよ…この不幸な姫をお救い下さい…」

崩れ落ちるアンリエッタ。

何か、聞いててイライラするな…その喋り方。

「姫様！姫様のご婚姻を妨げる材料って何なのですか？」

「それは…私が以前したためた一通の手紙なのです」

「手紙？」

「そうです。それがアルビオンの貴族達の手に渡ったら…彼等はすぐにゲルマニアの皇帝にそれを届けるでしょう」

「手紙の内容は？」

「…それは言えません。ですが、それを読めばゲルマニアの皇帝は…私を決して許しはしないでしょう。婚姻は潰れ、同盟も反故になり、トリステインは一國にてあの強大なアルビオンに立ち向かわなければならぬでしょうね」

読めた、その手紙の内容って、恋文じゃねえの？」

「!？」

「ザンクロウ！アンタ何言ってるのよ！？」

「うおっ！？何で俺の考えてる事が解った！？」

「手紙の内容って辺りからよ」

またやっちまっただぜ…俺ってホントに本音が出やすいな…。

「何で恋文なのよ！」

「だって、一応婚約者になってるゲルマニアの皇帝に見せたらまずい物だろ？って事はだ、アルビオンに好きな奴がいて、そいつ宛に出したって所だろ？」

「そう、使い魔さんの言う通り…あの手紙の内容は、アルビオン王家の皇太子…ウェールズ・テューダーへの恋文ですわ」

「恋文…」

やっぱな。

「その恋文の所為で同盟が無かった事になるって訳か」

「姫様！その手紙は何処にあるのですか！」

「…アルビオンです」

「え！？という事は、すでに敵の手に！？」

「いえ、その手紙を持っているのは反乱勢ではありません。それに對抗して争いを繰り広げている王家のウェールズ皇太子なのです」

「ウェールズ皇太子？あの凜々しき王子様が？」

「ああ！このままでは破滅です！ウェールズ皇太子は遅かれ早かれ反乱勢に囚われてしまうわ！そうなれば、あの手紙も明るみに出してしまう！そうになったら破滅です！」

って、よくよく考えたら、それってお姫さんの自業自得じゃねーか！

「では姫様、私に頼みたい事というのは…」

「ああ！私つたら何て事でしょう！混乱しているのです！貴族と王党派が争いを繰り広げているアルビオンに赴くなんて危険だわ！頼めるわけありません！」

「何をおっしゃいます！例え地獄の釜の中だろつと、龍のアギトだろつと、姫様の御為とあらば、何処なりと向かいますわ！姫様とトリスティンの危機…このラ・ヴァリエール侯爵家の三女ルイズ・フランソワーズ、見過ごす訳にはまいりません！」

「この私の力になってくれるというのルイズ・フランソワーズ？懐かしいお友達！」

「もちろんですわ姫様！このルイズ、いつまでも姫様のお友達であり、まったく理解者でございます！永久に誓った忠誠を、忘れる事などありませんか！」

「ああ、忠誠。これが誠の友情と忠誠です！ 感激しました。私、あなたの友情と忠誠を一生忘れませんわルイズ・フランソワーズ！」

…もう我慢出来ねえ！

「よくもぬけぬけと図々しい事が言えるなお姫さんよお！」

「えっ？」

「ちよつ、ザンク로우！？」

ザンクロウは、話の内容を聞いて苛立ちを覚えていた。

「言ってみりゃあそりゃ、自分の所為で国が危うい状況になつてる事じゃねえか！しかも自分のケツをルイズに拭かせ様なんてな！さすがはお姫様、自分の保身の為にルイズに死ねつて言ってるんだからな！」

「！？」

「ザンク로우！？アンタ何言つてんのよ！？」

「お姫さん、アンタさつき言つただろ？「貴族派と王党派が争いを

繰り返しているアルビオンに赴け」ってな、言ってみれば戦場のド真ん中じゃねーか！戦闘のせの字も知らないルイズが行った所で、すぐに死ぬのが目に見えてくるだろうが！」

「そ、それは…」

「アンタは自覚して無えみてえだが、お前はルイズの性格を利用して、自分の不始末を押し付けてんだよ！」

「っ！！？」

「さっきの会話から聞いてよく分かった。ルイズはアンタの為なら喜んで命を捧げる様だが、アンタはその手紙さえ無事ならそれでいいと考えてるだけの、単なる自己中女だ！」

「ザンクロウ！アンタいい加減な、よいのです…」姫様！？」

途中から下を向いて鬱になっていたアンリエッタが言い出した。

「使い魔さんの言う通り、私は自分の事しか考えていませんでした…宮廷内でも、私と本音で話せる人はいませんでした。そんな時、フーケを退けたルイズの話聞いた時に思いました、「ルイズなら私の頼みを聞いてくれる」と」

「姫様…」

「……………」

「私には…頼れる者はルイズしかいなかった…ルイズならと思ってこの事を話しました。私は…ルイズの人の良さを利用して手紙を取りに行かせようと思いました…私は…」

泣き始めるアンリエッタ。

「つたく、女つてのはこれだからメンドクせえ…」。

するとルイズは、アンリエッタの近くに寄った。

「姫様…私行きますわ、アルビオンに」

「！！？ルイズ…」

「良いんだな？」

「私はトリステインの貴族として、そして姫様のお友達として、手紙を取り戻してみせる！」

「ルイズ！」

アンリエッタは感涙した。

「つたく、結局こうなるか。ま、それがルイズなんだけだよ。」

「はあ、しゃーねえ、ご主人様がそう言うんなら、俺はもう口出ししねえ」

「使い魔さん……」

「だがなお姫さん！」

「は、はい！？」

「これから向かうのは戦場だ！ルイズの命の保証は無いに等しい、それでも向かおうとするルイズの意思に感謝しな」

「はい！」

「それから、この件は友達の頼みって理由じゃ割に合わねえ、だから命令すれば良い！」

「命令、ですか？」

「そうだ！この件はルイズの友としてじゃなく、トリステイン王国王女として命令すれば良い！」

「…分かりました」

まったく、慣れねえ説教をしちまった俺……。

アンリエッタはルイズに向けて命令した。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ・ド・トリステインが命じます。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、アルビオンのウエールズ皇太子から手紙を受け取りに行きなさい！」

「かしこまりました、王女殿下」

これで、アルビオンに行く事が決まったな。
こうなったら腹括るか！

「俺はルイズの使い魔として、全力を持ってルイズを守ると誓おう
！」

「よろしくお願いします、頼もしい使い魔さん」

アンリエッタはザンクロウに向けて頭を下げた。

「ひ、姫様！？こんな無礼な奴に頭を下げなくても！？」

「よいのです。使い魔さん、私の大事なお友達を、これからもよろ
しくお願いしますね」

するとアンリエッタは手を出してきた。

「い、いけません姫様！？ザンクロウにお手を許すなんて！」

何だ？握手か？いや、手の甲を上にしてるし、どうゆう意味だ？

「なあルイズ、これって何の意味だ？お手って、犬のお手か？」

「違うわよ！ホントに知らないのね…いい？お手を許すつてのはね、
砕けた感じで言えばキスしていいって事よ」

「き、キスうつ！？」

おいおいおい、良いのか！？キスなんて！？キスを許すなんてなあ、
さすがファンタジー…。

ザンクロウは、右手でそつとアンリエッタの手を取った。

そして、

「きゃっ!?!」

「えっ!?!」

その手を思いつきり引つ張り、左手で腰に手を回した後、ザンクロウの顔はアンリエッタの顔に近づいて行き、唇同士でキスをした。

「!?!?!?!」

「なっ!?!」

キスし終えたザンクロウは唇を離すと、

「きゅ〜〜〜…」

アンリエッタは気を失った。

「あれ?気絶しちゃったな?」

「ひ、ひひひひ…」

「ルイズ?」

ザンクロウはルイズの方に振り向くと、ルイズはプルプル震えていた。

「あれ?」

何か嫌な予感…。

「ひ、姫様に、なあにしてんのよっ!この…バカ犬うううううううううう!?!?!」

「どわっ!?!」

ルイズはザンク로우目掛けて飛び蹴りしたが、

ゴーン

と鈍い音を立て、

「いったあああああつ！！？いたたたたたたつ！！？」

ルイズは痛みあまり転がった。

危ねえ、咄嗟に鋼鉄状態にして良かったぜ。

そう、ザンクロウはまだノーロさんに自分の毛を付けたままだったので、材質を鋼鉄に変えた為、ルイズの攻撃を防いでいたのだった。

「そうだった…あんたの体って、すごい頑丈だったんだっけ…」

「フーか、何で蹴り出すんだよ？」

「アンタが姫様にキスしたからでしょうが！」

「はっ？さつきお前キスしていいって…」

「誰が唇でしていいって言ったのよ！手よ！手にキスするのよ！」

「へっ？手にキスするモンだったのかあれ？」

「当たり前でしょ！」

知らねえから聞いて、キスしていいって言うからってつきり…。

すると、アンリエッタは目を覚ました。

「あつ、姫様！？も、申し訳ありません！使い魔の不始末は私の不始末です！っていうかあんたも謝りなさい！」

「どわっ！？」

ルイズに髪を引っ張られるザンクロウ。

「わ、悪い、でもキスしていいって…」

「だからって唇にする普通！」

「しゃーねーだろ！知らなかったんだから！」

「それぐらい知っておきなさいよ！」

「い、いいのです…忠誠には、報いる所が、なければなりませんから…」

アンリエッタは平静を保つ様に言った。

その時、扉が急に開いた。

「貴様ーっ！姫殿下にーっ！何をしてるかーっ！！」

部屋に入って来たのはギーシュだった。

つか何でこいつがここにいんだよ！？

「ギーシュ！？あんた立ち聞きしてたの、今の話を！？」

「薔薇の様に見麗しい姫様の後をつけてみればこんな所へ、それでドアの鍵穴からまるで盗賊の様に様子を窺えば…平民のバカがキス…」

「ギーシュ…それってストーカーと覗きだぞ…」

「決闘だ！このバカチン「ドカツ」があああっ！！？」

「先手必勝」

取り合えず何か喚いていたギーシュをぶっ飛ばして、ってそう言えばこいつ、俺達の話盗み聞きしてたって事だよな？

「ルイズ、姫さん、このバカが俺達の話盗み聞きしてたみたいだが、どうする？」

「そうね…今の話を聞かれたのはまずいわね…」

すると、倒れていたギーシュは立ち上がった。

「姫殿下！その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけます様」

「え？あなたが？」

「お前は黙ってる」

「ふぎやっ!？」

ザンクロウは足を引つ掛けてギーシュを転ばした。

「頼みます！僕も仲間に入れてくれ！」

何でこいつこんなに必死なんだ？

そっぴや二股してた巻き髪女と地味系女はどうなったんだ？

「お前、二股して振られたからって、今度は姫さんに口説くのか？」

「失礼な事言うな！僕はただ純粹に姫殿下のお役に立ちたいってだけだ…って、元はと言えば君の所為じゃないか！」

「何で俺の所為なんだよ！振られた原因を作ったのはテメエの自業自得じゃねーか！」

俺とギーシュが口論していると、姫さんが呟いた。

「グラモン？あの、グラモン元帥の？」

アンリエッタがきよとんとした顔でギーシュを見つめた。

「息子でございます。姫殿下」

ギーシュは立ち上がると恭しく一礼した。

「あなたも、私の力になってくれるというの？」

「任務の一員に加えて下さるなら、これはもう望外の幸せにございます」

調子の良い奴だな…。

「ありがとうございます。お父様も立派で勇敢な貴族ですが、貴方もその血を受け継いでいるようね。ではお願いしますわ。この不幸な姫をお助けください、ギーシュさん」

「姫殿下が僕の名前を呼んでくださった！姫殿下が！トリスティンの可憐な花、薔薇の微笑みの君がこの僕に微笑んで下さった！」

ギーシュは感動の余り、後ろに仰け反って失神した。

「…氣い失ったぞ…大丈夫かこいつ？」

先が不安になってきたな…。

「馬鹿は放っておきましょう。では姫様、先程申し上げた様に、明日の朝アルビオンに向けて出発します」

「分かりました。ウエールズ皇太子は、アルビオンのニューカッスル付近に陣を構えていると聞き及んでいます」

「了解しました。以前、姉達とアルビオンを旅した事がございます故、地理には明るいかと存じます」

「旅は危険に満ちています。アルビオンの貴族達は、あなた方の目的を知ったら必ず妨害して来るでしょう」

アンリエッタは椅子に座り、置いてあったペンと羊皮紙を使い、手

紙をしたためた。書き終わると、その手紙を巻き、杖を振って封蝋が施され、それがルイズに渡された。

「ウエールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡して下さい。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう」

するとアンリエッタは、自身の指に嵌めてあった指輪を引き抜き、それもルイズに渡した。

「母君から頂いた「水のルビー」です。お金が心配なら売り払って頂いて構いません。これが…せめてものお守りです」

「姫様：ありがとうございます」

「ルイズ、トリステインの未来をどうかお願いします。そして、必ず必ず帰って来てくださいね」

「はい！」

こうして俺達は、姫さんの任務を受け、異国アルビオンへ出発する事になった。：明日の朝出発するけどね。

そんでもって翌日、またサイドバイクを具現化させた。忘れがちだが、ちゃんとデルフは持ってきてる。

「なあ君、これは何だい？」

「バイクだ」

「ばいく？」

「馬以上に早く走れる乗り物だ」

「すぐく早かったわよ。一時間半でトリスタニアに着いちやうほど何だから」

「そんなに早いのかいこれが!？」

ギーシュが不思議がつてるな。

「それはそうと、一つお願いがあるんだが…」
「何だ？」

「僕の使い魔を連れて行きたいんだ」
「お前の使い魔？どこにいるんだ？」
「ここさ」

そう言つて地面を指すギーシュ。

「？いないじゃない」
「まあ、見ててくれ」

ギーシュが地面を足で叩く。すると、地面が盛り上がり、茶色の生物が姿を現した。

「紹介しよう！僕の可愛い使い魔、ヴェルダンデだ！」

でさえモグラだな。

「あんたの使い魔つてジャイアントモールだったの？」
「ああ、いつ見てもキミは愛らしいなあ。ミミズはたくさん食べてきたかい？」

巨大モグラのヴェルダンデはコクリコクリと頷いた。

「そうかい！美味しかったかい！」

…傍から見るとキモいぞギーシュ…。

「駄目よギーシュ。ジャイアントモールは地面の中を進んでいくん

でしよう？私達、これからアルビオンに向かうのよ？地面を掘って進む生き物なんて連れて行けないわ」

「何だつてえ！？」

ギーシュは地面に膝を付いた。

「お、お別れなんて、つらい、つらすぎるよ…ヴェルダンテ…」

その時、ヴェルダンテが鼻をひくつかせた。

そしてルイズに擦り寄ってきた。

「な、何よ？」

「何だ？主人ギーシュに似て女好きか？」

すると、ヴェルダンテはいきなりルイズを押し倒すと、鼻で体をまさぐりだした。

「ちょ、ちょっと！？や、ちょっと何処触ってるのよ！」

何だろう…どこかエロチックな光景に見えなくもないけど…。

「いやあ、巨大モグラと戯れる美少女ってのは、ある意味官能的だな」

「みてえだな」

ザンクロウとギーシュは、腕を組んで頷きあつた。

「バカな事言っていないで助けなさいよ！きゃあ！？」

ヴェルダンテは、ルイズの右手の薬指に光るルビーを見つけると、

そこに鼻を擦り寄せた。

「この！無礼なモグラね！姫様に頂いた指輪に鼻をくっつけないで！」

ギーシュが頷きながら呟いた。

「なるほど、指輪か。ヴェルダンテは宝石が大好きだからね」
「嫌なモグラだな」

「嫌とか言わないでくれたまえ。ヴェルダンテは貴重な鉱石や宝石を僕の為に見つけてきてくれるんだ。土系統のメイジの僕にとって、この上も無い、素敵な協力者さ」

そんな時、一陣の風が舞い上がり、ルイズに抱きつくヴェルダンテを吹き飛ばした。

「ヴェルダンテっ！？誰だっ！」

ギーシュが激昂してわめいた。

朝もやの中から羽帽子を被った、1人の長身の貴族が現れた。
ん？あれって…確か昨日いた？

「貴様、僕のヴェルダンテに何をやるんだ！」

ギーシュは薔薇の造花を掲げた。

だが、一瞬早く羽帽子の貴族が杖を引き抜き、薔薇の造花を吹き飛ばした。

へへ、結構強いな。

「僕は敵じゃない。姫殿下より、君たちに同行する事を命じられて

ね。君たちだけではやはり心もとないらしい。しかし、お忍びの任務であるゆえ、一部隊つける訳にもいかぬ。そこで僕が指名されたって訳だ」

長身の貴族は帽子を取ると一礼した。

つかあのお姫さん、俺だけじゃ不安だったって言いてえのか？

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

文句を言おうと口を開きかけたギーシュは相手が悪いと知ってうなだれた。

魔法衛士隊は、全貴族の憧れである。

ギーシュも例外ではない。

ワルドはそんなギーシュの様子を見て首を振った。

「すまない。婚約者がモグラに襲われているのを見て見ぬ振りは出来なくてね」

「えっ？」

「ん？」

婚約者？って事は！？

「ワルド様……」

「久しぶりだねルイズ！僕のルイズ！！」

ワルドは笑みを浮かべると、ルイズを抱え上げた。

「わ、ワルド様！？」

「ははっ！相変わらず軽いなキミは！まるで羽のようだ！」

「そ、そんな…お恥ずかしいですわ」

何か見てて腹立つな…それに僕のルイズって…。ロリコンかお前は！

「ではルイズ、彼等を紹介してくれないか？」

ルイズを下ろしたワルドが、俺とギーシュに視線を移した。

「私の使い魔のザンクロウと、ギーシュ・ド・グラモンです」
「は、初めまして！」

ギーシュは深々と頭を下げた。

「キミがルイズの使い魔か。人とは思わなかったよ」

「どーも初めまして、ザンクロウだ」

人じゃねーよ髭ロリコン！

「僕の婚約者がお世話になっているよ」
「そりやどつも」

確かにこいつは人間の中じゃ相当強いだろうけど、俺の敵じゃねーな。

「どうした？もしかして、アルビオンに行くのが怖いのかい？なあに！何も怖い事なんてあるもんか。君はあの土くれのフーケを退けたのだろう？その勇気があれば、なんだって出来るさ！」

コイツの中の俺は何処まで低い存在だと思ってるんだ？

ワルドが口笛を吹くと、朝もやの中からグリフォンが現れた。

鷲の頭と上半身に、獅子の下半身がついてて、立派な羽が生えた幻

獣である。

ワルドはひらりとグリフォンに跨ると、ルイズに手招きした。

「おいで、ルイズ」

ルイズはちよつと躊躇うようにして、俯いた。

ルイズは暫くモジモジしていたが、ワルドに抱きかかえられ、グリフォンに跨った。

つかおいでって！？寒っ！？鳥肌が立ってきやがった！

ワルドは手綱を握り、杖を掲げて叫んだ。

「では、諸君！出撃だ！」

グリフォンが羽ばたき、空へ舞い上がる。

ザンクロウもバイクに乗り（ギーシュはサイド席に乗せた）、後を追う様に走り出した。

アンリエッタサイド

出発したルイズ達を、アンリエッタは学院長室の窓から眺めていた。

「始祖ブリミルよ…どうか、彼女達にご加護を…」

「痛っ！おお、これは大きな鼻毛じゃな」

「見送らないのですか？オールド・オスマン」

「御覧の通り、この老いぼれは鼻毛を抜いておりますので…」

「あ、あの…どうしてそんなに余裕な態度を？」

トリスティンの未来がかかった事態ですが、何でしょうか？このオールド・オスマンの余裕は？

「すでに杖は振られました。我々は待つだけ…違いますか？」

「それはそうですが…」

「なあと、彼がいれば何も問題ありませんまい」

「彼？ギーシユさんの事ですか？それともワルド子爵？」

「どちらも外れです」

「では…ルイズの使い魔のあの方が？」

アンリエッタは、姫である自分の言葉を真つ向から否定した青年の事を思い出した。あの時に向けられた鋭い瞳を思うと、少しだけ恐怖を覚えていた。

確かに彼は、平民とは思えない程の強い何かを持っている様な方でした。

「彼は、私達とは別の世界から来た青年なのじゃ」

「別の？異世界という事ですか？」

「そうです。そして、我々とは比べ物にならない程の強力な力を秘めておる。これは誇張でも何でもありませんが、彼が本気になれば…恐らく、この世界で彼を止められる者は存在しないでしょうな」

「あなたがそこまで言うなんて…」

彼は一体…何者なんでしょうか？

「それほどの存在なんじゃよ。姫は始祖ブリミルの伝説をご存知かな？」

「通り一遍の事なら知っていますが？」

オスマンはにっこりと笑った。

「では、第四の使い魔の件はご存知かの？」

第四の使い魔？それって…？

「始祖ブリミルが使役した四体の使い魔の中でも、最強と言われ、歴史からその名が消されたという？」

それが一体何の？…もしや！？

「まさか！？あの彼が！？」

オスマンは喋り過ぎたなと戸惑ってしまった。

「！？オホン、まーとにかく彼は、その第四の使い魔の如くメイジを圧倒したのですな」

「彼は、メイジ殺しという事ですか！？」

「まあ平たく言えばの」

だから安心していられるのですか？

「ならば信じましょう…異世界から吹く風に」

アンリエッタ達は、ザンク로우達の無事を願った。

????????サイド

ここはアルビオンの森の奥の集落です。

あっ、私の名前はティファニアです。こんにちわ。

この村はウエストウッドの村と言います。

集落と言っても、実際はただの孤児院なだけだね。

あつ、そうそう。実は今朝、マチルダ姉さんからの手紙とお金入りの大きな袋が来たんです。

「何々？」

私は手紙の方を見た。

『ティファニア、チビ達と一緒に元気にしてるかい？私は元気にしてるよ。アルビオンじゃ仕事が出来場所が少なくなっちゃってるから、トリステインまで行く事になっちゃってな。そこで働こうにも、トリステインじゃ平民の風当たりが悪くて中々仕事が出来なかつただけ、そんな私もようやく働ける場所を見つけたんだ。トリステインの魔法学院さ！そこで学院長の秘書をやる事になったんだ。仕事の方は今までで大変だけど、アンタ達の為なら色々頑張つて来れたからね。夏季休暇になったら一度帰郷するよ。それじゃ、体に気をつけてな。マチルダより』

ティファニアは感涙した。

「マチルダ姉さん…ありがとう」

ティファニアは、トリステインにいるマチルダに感謝していた。

王女とザンクロウ（後書き）

少しずつテファのイベントを入れて行こうと思います。
次回は賊乱入とワルドザマア的な事をします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0162x/>

ゼロのロストマジック使い

2012年1月11日02時48分発行